

大垣女子短期大学

紀 要

第 65 号

2 0 2 4

目 次

原 著

保育実務研修の質保証に向けた一考察

—科目の現状と今後の課題—名和 孝浩・立崎 博則・宮本 紗子…… (1)

表現の失敗から新しい表現を探る造形ワークショップの実践と考察.....立崎 博則…… (11)

若年消費者啓発のための産学官連携プロジェクト

～「買輩革盟（バイヤーカクメイ）」の活動による効果と学生の学び～
.....茂木 七香…… (23)

資 料

2023 年度大垣女子短期大学学生相談室の活動報告茂木 七香・松下 智子…… (35)

彙報（学外における主な研究・教育並びに社会活動） (45)

BULLETIN OF OGAKI WOMEN'S COLLEGE

NO.65 (2024)
CONTENTS

【Original Articles】

- A Study of the HOIKU JITSUMU KENSYU for Quality Assurance
Current Status and Issues to Subject Takahiro NAWA,Hironori TACHIZAKI,Ayako MIYAMOTO (1)
- Art workshops exploring a new method from failure and
unexpectedly expressions Hironori TACHIZAKI (11)

- The Industry-Academic-Government Collaboration
for Young Consumers' Awareness Nanaka MOGI (23)

【Reports】

- Activity Report 2023 - Student Counseling Room Nanaka MOGI,Tomoko MATSUSHITA (35)
- Miscellaneous (45)

保育実務研修の質保証に向けた一考察 —科目の現状と今後の課題—

A Study of the HOIKU JITSUMU KENSYU for Quality Assurance Current Status and Issues to Subject

名 和 孝 浩 立 崎 博 則 宮 本 純 子
Takahiro NAWA Hironori TACHIZAKI Ayako MIYAMOTO

1. はじめに

1) 現代社会に求められる保育の質保証

現在、日本社会では保育の「量」的な問題ではなく、「質」的な問題へと、議論が向けられている。例えば、これまでの「量」的な問題であった待機児童数は、厚生労働省¹⁾によると2022年4月時点で2,944人と、調査開始以来4年連続の減少となり、直近の最多待機児童数である2017年の26,081人と比較して、約9分の1まで減少した。また、全国市町村のうち約8割で待機児童は解消したと発表され、現在でも50人以上の待機児童を抱える自治体はわずか10となった。そのため、量的な問題は解消されつつあるとし、質的な問題への取り組みへと移り変わっている。また、昨今のこども家庭庁の発足や、こども基本法の制定といった点でも、子どもの人権意識の高い社会の実現に向けた、質的な向上への取り組みが、今後はより重要ななるのではないかと考えられる。

さらに保育の質的な問題については、不適切な保育をはじめとする保育現場での問題も挙げられる。不適切な保育は、保育者個人の問題だけでなく、保育現場の人手不足や配置基準の低さ、待遇面の改善などの国や行政が改善すべき問題の多さ²⁾も指摘され、保育者個人の課題ではなく、行政も含めた日本全体の質の向上に向けた取り組みが急務である。

2) 保育者養成校における現状と課題

保育者養成を巡っては、佐伯³⁾は保育者養成のカリキュラムがより多様で高度な専門的知識・技能が追及される一方で、保育者が直面している課題がほとんど反映されていないことを指摘している。現場での実習の評価や指導に関して、指導者・評価者になるための要件が定められておらず、現場の裁量や自助努力に任される傾向が強いことや、生涯において継続的なキャリアを展望したスキルを身に付ける必要性について触れている。また、保育に関する業務領域の広さに保育者養成のカリキュラムが対応しきれていないという課題があり、2年制養成課程を基礎として続けたことに由来するカリキュラムの量的・質的限界⁴⁾についても指摘されている。既存のカリキュラムでは、現代の多様なニーズに応える保育者の資質を育てることに課題があり、今後は、現場の保育に対応し得るカリキュラム自体の見直しが必要であると考えられる。これについて、単に4年制課程にするだけでなく、保育士養成年限に関する調査では、2年間の養成では十分に応えることができないため、「2年の基礎資格の上に上乗せの1年分で分野別、領域別を学ぶ」⁵⁾といった意見もあり、2年制課程か4年制課程かという二元論ではなく、より柔軟で、現場のニーズに応えるカリキュラムの視点が求められていると言える。

また、現場の多様なニーズに応えるには、当然知識だけではなく、技能としての保育実践も求められる。指定保育士養成施設の指定及び運営の基準⁶⁾には、保育実習の目的は「保育実習は、その習得した教科全体の知識、技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用能力を養うため、児童に対する理解を通じて保育の理論と実践の関係について習熟させることを目的とする」と定められており、実習単体ではなく、他科目との関連性が求められる、極めて重要な位置づけとされている。そのため、今後の保育の質保証を可能とする保育者養成のカリキュラムを見直す際は、実習や現場での経験をどのように学ぶかという視点が必ず重要となると考えられる。

3) 3年制課程における保育実務研修の取り組みについて

本学幼稚教育学科は、3年制課程の保育者養成校であり、3年次には保育実務研修として年間を通じた現場研修を行うカリキュラムがある。長期間の現場での学修と、3年制課程ならではの授業展開となっており、先行研究でも指摘された多様なニーズに応えるカリキュラムとして、現代社会に求められる1つの方策なのではないだろうか。しかし、保育実習や幼稚園教育実習などに比べ、長期的な研修や保育のインターンシップの実践に焦点を当てた研究は、その実施の難しさからか、多いとは言えない現状である。保育の質的な保証に向けて、長期的な研修やインターンシップにより、学生にどのような学びがあるのか、生涯において継続的なキャリアを育成するために、どのような点で有効であるのかを検証することは、今後の保育者養成カリキュラムを考えるうえでも重要であると言える。

4) 目的

保育の質保証は急務の課題とも言え、それ

を行う保育者の実践的指導が重要であることは自明である。そのため、本学幼稚教育学科が取り組む保育実務研修の科目は、学生でありながら、インターン的な位置づけで、保育実践経験を年間通じて得られるため、必要かつ有効な取り組みではないかと考えられる。しかし、現在までに保育実務研修の学生への効果や、現場での評価及び有効性の検証は不十分であると言える。保育実務研修の有効性の検証は、本学幼稚教育学科の教育カリキュラムの検証だけでなく、学生時代の現場経験の充実として、現在求められる日本の保育者養成のカリキュラムを考えることへの一助たり得るのではないかだろうか。

そこで、本研究の目的は、3年制課程である本学幼稚教育学科の根幹となっている保育実務研修の現状をあらためて整理し、今後の有効性等の検証のための課題を明らかにするなど、今後の保育実務研修にまつわる研究における基礎資料を得ることとする。

2. 方法

保育実務研修における実際の学内及び学外での学修内容を整理する。シラバスや研修の手続きに関する資料、学生への指導に使用している学修資料、また保育実務研修で使用している記録様式等を活用して進める。

3. 結果

1) 保育実務研修の歩み

本学幼稚教育学科は平成19年度より3年制課程へと移行しており、保育実務研修は3年次のカリキュラムとして、平成21年度から開始した。保育実務研修は実習科目ではなく、演習科目として位置付けている。そのため、通常の保育実習や幼稚園教育実習のように、実習の事前事後指導と実習自体が別科目として分かれておらず、同科目内にて、事前事後の学内指導と、学外での現場研修を行うようにしている。開講はおよそ4月～7月ま

での前期に保育実務研修Ⅰ・Ⅱと、10月～1月までの後期に保育実務研修Ⅲ・Ⅳを、それぞれ週2日開講している。学外での現場研修の日数は、その年度の学年歴に応じて、各期20日以上と定めており、1年間で40日以上の現場研修を行うことができている。これにより、厚生労働省及び文部科学省が定める保育者養成校の保育士資格並びに幼稚園教諭免許2種の取得に必要な保育所実習と幼稚園教育実習のおよそ2倍の現場経験をカリキュラム内で可能にしている。

2) 保育実務研修先との共通理解

保育実務研修では、学外での現場研修を同一施設（保育所、幼稚園、認定こども園他、一部児童養護施設、障がい者支援施設等を含む）で年間実施している。実習のように約2週間で指導が修了するわけではないため、保育実務研修の学修内容や指導の方針について、研修を行う各施設と共通理解を図る必要がある。そのため、本科目では実習で用いられるような承諾書の他に「連携協定書」を使用している。連携協定書は、通常の実習とは異なる長期間の現場研修を行うにあたり、研修内容や期間、指導方法に関する相互理解を得たうえで、有効な指導を受けられるよう活用されている。

連携協定の件数と変化については、表に示す（表1）。協定件数は、保育実務研修を開始した平成21年度の17件から、令和5年度には102件に増加している。うち、市町村との連携は21件、私立保育園／認定こども園／幼稚園は71件、施設は10件となっている。市町村との連携については、協定を締

結した自治体が管轄する全ての保育施設での研修が可能であり、公私立ともに、主に保育園、こども園の増加率が高い。私立幼稚園については、学生が現住所から希望する幼稚園の有無に差があるため、全体の件数としては保育園／認定こども園よりも少ない。しかし、保育・教育施設の形態については、地域ごとの特色があるため、その地域の実情に合わせて連携協定が締結されていると言える。また、全体の件数自体は増加しており、保育実務研修を通じて本学幼児教育学科の3年制課程の特色や指導内容などの共通理解が図られていると考えられる。

3) 保育実務研修の指導方法

研修施設には1年間を通じての現場研修として依頼している。また、学内での事前事後指導と、学外での現場研修とを合わせて1つの科目としているため、現場研修については出欠簿を使用し、研修施設と相互で勤務時間の管理を依頼している。

保育実務研修を実施する際の学生の週間スケジュールは、現場研修を2日間行い、残りの3日間は大学での講義を受講している。また、その日の研修終了後に、時間外課題として、2日分の研修内容を両面1ページの記録様式に、その日ごとにまとめる。実習のように、作成した研修記録を翌日に研修施設へ提出することができず、週明けの提出となる。そのため現場研修を行った週に記録を通した指導を研修施設から受けることが難しい。そこで、保育実務研修では、学内の学科専任教員が個別に学生の指導担当となる、指導担当制をとっている。この指導担当は、幼

表1 保育実務研修における連携協定件数の推移

区分	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	合計	既協定件数
市町村(公立園)	0	1	0	0	0	6	3	1	3	0	0	0	2	2	1	1	1	21	
私立保育園/認定こども園	3	10	2	0	5	3	1	1	3	3	4	0	1	2	5	1	2	46	102
私立幼稚園	0	0	1	0	1	3	1	3	2	2	1	1	0	0	3	2	5	25	
施設	0	0	0	0	0	2	1	2	4	0	0	0	0	0	1	0	0	10	

4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
前期学内研修（事前）	研修施設オリエンテーション		現場研修	前期学内研修（事後）	夏季休業	後期学内研修（事前）		現場研修	後期学内研修（事後）		春季休業

図1 保育実務研修の年間スケジュール

児教育学科の専任教員で分担しており、年間を通じて同一の教員から指導を受けることになる。同一の教員から継続して指導を受けるため、各学生の課題や変容をつかむことができ、学生の保育者としての育ちを捉えやすいと考えられる。しかし、学生の指導については、個別の指導時間が授業として確保されているわけではないため、それぞれの教員のオフィスアワーや、空き時間などを活用した指導となっている。そのため、短時間での指導や、記録を通した添削・修正や指導コメントでの指導という方法をとっている。各学生の保育実務研修の実施内容について、特記事項や注意事項等があれば、会議内で共有を図っている。

また主に研修記録を通した指導内容は、学生個人に直接伝えることになる。そのため、研修施設の指導者との指導内容等の共有は、その都度ではなく、原則、前・後期に1回ずつ行う訪問指導の際にしている。また訪問指導については、実習における訪問指導と同様の手続きを取り、訪問記録を作成し、実習における実習指導担当者にあたる、保育実務研修の主担当者へ提出するようになっている。さらに現場研修終了後、研修施設からの所見により、個々の学生の取り組みに対するフィードバックが得られるようにしている。

4) 学内開講における授業の内容

年間のスケジュールとして、前・後期ともに事前指導を行ったうえで現場研修を開始し、その後、事後指導によるまとめを行っている（図1）。前期においては、現場研修に向けての準備や学修が中心であり、事後指導は学生が各自で振り返りを行い、自己課題を定めることとしている（表2）。毎回の研修の振り返りは各指導担当教員と行っているものの、前期のまとめた振り返りの時間として、前期現場研修終了後の学内研修期間に、個人ではなく、全体での振り返りの時間の確保が課題となる。

また後期においては、現場研修終了後の振り返りやまとめ、また他学年への学びの伝達などが中心であり、学生相互の学修のまとめができていると捉えられる（表3）。

さらに、前・後期を通じて他科目である保育・教職実践演習では、学生自身が課題としてまとめた実習・研修記録の事例から、実習や研修から学んだ保育エピソードを通したカンファレンスを行っている。これは、学生がグループワークを行い、学生が経験した保育事例に関する討議を行うものである。保育実務研修で得られた事例を用いることで、保育実践の問題提起と課題解決能力を養うことができると考えられる。そのため、事後学修でのまとめだけでなく、日常的にも振り返りを

表2 前期保育実務研修学内研修

回	事前/事後	内容
1	事前指導	前期ガイダンス
2		現場オリエンテーションについて
3		研修ファイルと必要書類について
4		部分実習について
5		研修記録の作成について
6		前期課題の作成
7		学外研修に向けた質疑応答
8		最終確認
9	事後指導	前期振り返りレポート
10		他学年との実習交流会

表3 後期保育実務研修学内研修

回	事前/事後	内容
1	事前指導	後期ガイダンス
2		後期課題の作成
3		お礼状について
4		研修ファイルの提出について
5		部分実習の振り返り
6		要録の作成について
7		後期振り返りレポート
8		実習交流会準備 ／研修事後面談（アカデミックアドバイザー）
9	事後指導	実習交流会準備
10		他学年との実習交流会

行ながる現場研修ができており、大学と現場の往還性が確保されたカリキュラムであると言える。保育・教職実践演習のシラバスには前述した『実習や研修から学んだ保育エピソードを通したカンファレンス』を行うことや、授業時間外課題として、『実習・研修記録の整理と課題の抽出』を行うことなどが明記されており、保育実務研修のカリキュラムとの関連性も確認できる。

学生相互の振り返りが充実する一方で、研修施設からの所見を基に行なう教員との個別面談について、指導担当教員との実施は各教員が担当する授業等の兼ね合いや、時間的制約により、アカデミックアドバイザーとの実施にとどまっている。年間で指導を行なった担当教員との学修のまとめという視点から見ると、課題があると言える。

5) 現場研修における学修内容

現場研修では、各研修施設の受け入れ条件や指導方法に則って、現場からの指導を受けている。保育指導計画を作成しての部分実習については、前・後期で1回以上の実施を指導しており、研修施設によっては、1日実習を行う場合もある。保育・幼稚園教育実習では約2週間の短期間で、子どもの実態を把握し、保育内容を考案するという時間的制約に課題があると考えられる。しかし、保育実務研修では、長期間の研修だからこそ、より子どもの発達やクラスの実態を捉えることができる。クラスの実態に応じた保育のねらいや内容の考案は、より実践的な保育場面の構築になっており、保育実践力の向上につながることが考えられる。

一方で、保育・幼稚園教育実習での部分実習は、週の後半に行なわれることが多いが、日程上、保育実務研修は月・火曜での実施となるため、週始まりの子どもの姿の捉えにくさの課題はある。また保育実務研修の記録は学内の指導担当教員に提出することになっているが、部分実習に関する保育指導計画については、研修施設の指導担当者への提出となっている。部分実習は現場とのスケジュール調整やクラスの保育や子どもの実態に応じた内容の精査が必要不可欠である。そのため、研修記録と保育指導計画の指導担当者が異なることになり、同じ研修施設での実践として、指導の連携や共通理解の必要性があると言える。

また、保育指導計画の指導に関しては、毎月・火曜のみの指導となり、現場での指導がスムーズに進むとは限らない。例えば、学生が作成した保育指導計画をクラス担任が確認し、翌週に指導、さらに翌々週、学生が修正した計画を提出、などのスケジュールとなると、1回の部分実習を実施するための計画から実践まで1ヶ月かかることがある。通常の実習のような日程ではなく、保育実務研修な

図2 保育実務研修記録

らではのスケジューリングや調査が求められる。

6) 保育実務研修での記録様式と指導内容

記録については、連続して行われる2日分の研修内容について、両面1ページの記録様式に毎時記入している（図2）。研修施設は保育所・幼稚園・認定こども園の他、児童養護施設等も含まれており、それぞれの保育・教育方針も異なる。また、学生個人の課題設定も多岐に渡り、長期間の研修期間で、それぞれ取り組む内容も異なる。そのため、記録様式は自由記述欄を多く取ることで、様々な研修施設や、学生の課題に対応できるようにしている。記録の作成方法に関しては、前期の事前指導時に学修時間を設けている。記録の作成は、園での生活の流れ、エピソード記述の作成だけでなく、保育環境マップの作成といった、自由記述ならではの記録方法も指導している（図3）。保育の実践において河

邊⁷は、同時進行で展開する複数の遊びを把握するためには、環境図から記録を取ることがもっとも有効であり、全体の遊びを俯瞰することができるという点と、実態把握に必要な経験の導き出しの道筋がクリアになる点のメリットがあるとしている。このように、自由記述での記録にすることで、より実践的な保育の実態把握を行うことが可能である。

また、3年次はゼミ活動を行っているため、それぞれの研究テーマやねらいに関連のある視点で記録を作成している学生もいる。中には、園から写真撮影の承諾を得て、環境構成などを写真で貼り付けて視覚的に記録に残すといった取り組みもある。自由記述形式であるからこそ、学生はそれぞれの園の指導方針や、自己課題に応じた記録作成ができると考えられる。記録の作成内容については、翌日に研修施設への提出が困難である。そのため現場研修を行なった週に大学内の指導担当教員がチェックし、必要に応じた指導を行って

実務研修記録

図3 保育実務研修記録の記入例（環境マップ型）

いる。研修施設には、原則学生からの記録の提出と確認のみとしており、作成内容等の指導は任意としている。そのため、大学内における記録の指導が重要となる。

また学生によっては、自由記述であるから

こそ、自分なりにどのような記録を作成するか、悩む声も聞かれる。現場研修が開始された後は、保育実務研修内で学生同士が記録の作成方法を見合ったり、検討したりする場はない。そのため、他科目の「保育・教職実

践演習」内で前期に一度、保育記録をテーマとしたコマを設け、保育実務研修における記録作成についても触れている。その後は、学生個人、もしくは指導担当教員からの指導で、記録の向上に取り組むことになる。このように、学生の個別課題に応じた取り組みができるることは有意義であると考えられる。しかし、具体的な記録の作成と学びとの関連性や、どのような記録方法が有効であるかまでは調査できていない。

4. 考察

結果で示された内容から、今後の課題につながる示唆と考えられる視点についてまとめる。

1) 保育実務研修の有効性について

村上・八木・山本⁸⁾らは、教育インターンシップについて、半期の実施により、学生自身が就職に関する進路について考えたり行動したり、また大学での学修内容について、何を学ぶべきか、必要なことが学べているという感覚を高める契機となっている可能性を示唆している。

令和4年度全国保育士養成セミナーでも、現場の実習による現場経験では不十分である可能性が示され、保育インターンや保育現場でのボランティアといった、実習以外の現場経験の時間の必要性についても問題提起されている。それと同時に、ボランティア活動は課外での取り組みとなるため、「行きっぱなし・やりっぱなし」になることとなり、現場経験後の振り返りを学内で行うことなど、大学との往還性の課題も示された。しかし、カリキュラム上、授業時間内で保育施設等へ行くことは容易ではなく、学生時代の豊富な現場経験と大学での指導の往還は、それぞれの保育者養成校の課題として示唆されている。本学幼児教育学科の保育実務研修は、この点をフォローできていると言える。週2日の現

場研修と週3日の大学での講義を組み合わせることで、現場と大学の往還を可能としており、課題として提示された「行きっぱなし・やりっぱなし」とならないこと、「授業時間内での取り組みとする」ことについては、対応できていると考えられる。

保育者養成校における実習以外のインターンシップについて、平井、伊藤、藤山⁹⁾が、キャリア形成に有効であることを示唆している他、井上¹⁰⁾はインターナショナルスクールでのインターンシップから、参加学生のその後の学生生活が前向きな姿勢が顕著になった、などの報告が挙げられている。しかし、いずれも2日～6日程度であった。インターンシップの定義上、5日間以上のプログラムであることとされており、5日間のインターンシップにより、学生の意識変化はみられるものの、保育者としての実践力向上にどのように関与しているかは明らかではない。また現行の2年制課程及び4年制課程では、いずれも実習時間自体に差はなく、実践経験の蓄積という点では、カリキュラム上の課題も挙げられる。保育実務研修は3年制課程であるからこそ可能であり、保育者養成校におけるカリキュラムの1つの形として有効なのではないだろうか。

今後、具体的にどのような点で学生の保育実践力の向上につながっているのか、どのような点で有効となっているのかなど、調査することが課題として挙げられる。

2) 研修における指導方法について

保育実務研修は、週2日間の現場研修を継続して行っており、学内の指導担当教員が個別に配置されるため、研修状況や課題を把握しながら年間の指導を一貫して行える点に、大きなメリットがあると考えられる。保育実習における実習指導や訪問指導について、ミニマムスタンダードでは、実習は学生個々の学習であり、一人ひとりの学生に対する、実

習前→実習中→実習後の流れの中で、その育ちを捉え、継続してかかわることが求められる¹¹⁾としている。学内の専任教員が年間を通じて個別の指導を担当する仕組みには、継続的な保育実践の流れの中で、個々の学生の学修や実践力の向上に寄与している可能性がある。しかし、実際の学生への指導内容について、学期末の「学生による授業評価」を通じてフィードバックがあるが、あくまで全体に対してのことである。個別の教員の指導が学生に対してどのように影響しているのか、どのような指導が有効であったのかの検証は行われていない。

また特記事項や注意事項等があれば共有がなされているが、その他の研修内容や指導内容・方法の日常的な共有はどうだろうか。現在、実習等において、訪問指導の内容をICTを活用しながら全教員が共有できるようにする課題が挙げられている。実習では、学生が実習期間中は大学を離れるため、より実習中の学生情報を共有することが求められる。一方で、保育実務研修は大学と現場の往還性があるため、指導担当教員以外の教員とも、各講義やオフィスアワー、アカデミックアドバイザーとの面談等を通して自然な形で研修内容の情報は共有が図られていると考えられる。さらに、各指導担当教員の指導内容を互いに共有し、教員の指導方法の向上や、よりよい指導方法を模索することは必要になると考えられる。

また、カリキュラムとして、保育・教職実践演習との関連の有効性の検討が必要である。学生が研修の事前事後だけでなく、学外での研修期間中も振り返りを行うカンファレンスの取り組みについては、その有効性が期待される。また、他科目との関連という視点では、実習には実習指導だけでなく、各専門科目と保育実践の関連性に気づき、保育・教職実践演習以外の専門科目との具体的な関連性は今回確認できなかったため、今後の課題である

と言える。

学生による保育実務研修記録の作成については、現状、指導担当教員による大学内での指導が中心である。そのため、教員による指導方法の共通理解や、有効な指導方法の構築が必要となる。研修施設からの記録の指導については、年間における現場の負担を考慮すると、毎回の指導や添削は、やはり容易ではないと考えられる。しかし、年数回の指導や現場からのヒアリング、チェックリスト等を活用した効率的な指導方法等を検討する余地はある。

また、自由記述ならではの記録で、個別課題に応じができる点や、園や子どもの実態に即した記録ができる一方で、学生の自己課題の明確さや意欲によっても、探求度や記録の内容が変わるものではないだろうか。実際にどのような記録を作成することにより、どのような学修へつながっているのか。記録作成時や指導時の学生、研修施設の困りはあるのかなど、実際の検証をもとに、有効な方法を探ることが課題と言える。

研修施設の指導内容の確認は、前・後期で1回ずつ訪問指導にて各指導担当教員が直接行っている。頻度は少ないが、研修施設との共通理解をもとに、指導内容のズレを防ぐ仕組みはあると言える。しかし、1年間という長期間の研修となるため、より丁寧な指導内容や研修内容の共有が求められる。また、部分実習を行ううえでの日程や指導方法についても、子どもの実態を1ヶ月前から予想する場合もあり、子どもの実態把握には各研修施設に応じた工夫を行うなどの課題がある。

5. おわりに

本研究では、3年制課程ならではの長期間での現場研修の在り方に関する知見が得られた。今後は、明らかになった課題をもとに、学生や研修施設を対象とした、長期的な研修の有効性の検証を行うことが課題と言える。

有効性の検討については、保育実務研修のシラバスを基に、科目の到達目標がどのように達成されているかについても検証の焦点として定め、学生や研修施設へのヒアリング等を行っていきたい。また昨今求められる、さらなる保育の質保証に向けて、エビデンスに基づいた学修内容の精査が必要であり、教育課程のカリキュラムとして、他科目との関連性の検証を行いたい。

引用文献

- 1) 厚生労働省：令和4年4月の待機児童数の調査結果：2022
- 2) 菊池奈津美：言葉かけから見直す「不適切な保育」脱却のススメ、中央法規出版：1-6、2023
- 3) 佐伯知子：保育士及び保育士養成をめぐる現状と課題、京都大学生涯教育フィールド研究、3：55-61、2015
- 4) 吉田幸恵：保育士養成における課題、名古屋経営短期大学紀要、51：81-94、2010
- 5) 大嶋恭二：保育士の専門性と養成の課題、東洋英和大学院紀要、4：1-15、2008
- 6) 厚生労働省：指定保育士養成施設の指定及び運営の基準：2003
- 7) 河邊貴子：遊びを中心とした保育－保育記録から読み解く「援助」と「展開」－、萌文書林：73、2005
- 8) 村上裕介、八木利律子、山本弥栄子：学校インターンシップでの学びが大学生のキャリア意識と適応間に及ぼす影響、プール学院大学研究紀要、58：153-168、2017
- 9) 平井敏孝、伊藤孝子、藤山あやか：保育士・教員養成段階におけるキャリア形成支援－インターンシップの効果的な実施方法を探る－、滋賀文教短期大学紀要、22：17-28、2020
- 10) 井上敏孝：保育士及び幼稚園教員サポー
ト校におけるインターンシップ経験の講
後課題－インターナショナルプリスクー
ルでの実習を事例として－、インターン
シップ研究年報、22：1-6、2019
- 11) 一般社団法人全国保育士養成協議会：
保育実習指導のミニマムスタンダード
Ver.2「協働」する保育士養成、中央法
規出版株式会社：119-131、2018

表現の失敗から新しい表現を探る造形ワークショップの実践と考察

Art workshops exploring a new method from failure and unexpectedly expressions.

立 崎 博 則
Hironori TACHIZAKI

第1章 研究の目的と問い合わせ

本研究は、子どもの造形活動の中で失敗と言われる表現をどのように扱い、活用するかについての考察である。文部科学省¹⁾が出している「幼稚園教育要領」の「表現の領域」のねらいには、「(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。(文部科学省/2008)」の3つが挙げられている。自分なりの表現を楽しむというねらいの表現ではあるものの、表現を評価軸の1つに上手下手の評価がされる。生成AI技術に注目が集まる現在、美術教育の分野でもどのような表現の体験を受けさせるのかが議論されている。TBSラジオ文化系トークラジオ LIFE の生成AIについての回(2023年4月30日放送)で城西大学助教の塙越 健司氏が「豊かな表現にはうまい表現も下手な表現もある」と発言しているように、表現に対する評価は上手なものが良いものではなくそれ以外の評価軸もあると考えられる。例えば、制作する時間の中で、表現を楽しんだかや、やってみたいと思う表現ができたか、また、今までやっていないことにチャレンジしたかなど様々な評価軸が考えられる。では、それらができなかった場合、幼児美術として、その表現は評価されないのでしょうか。「表現する教室の作り方」で、鈴木光男氏²⁾は、「失敗は当たり前で価値あるものとして、その失

敗に感謝する教室にしていきたい」と述べている。失敗はマイナスの評価になるのではなく、それをどう扱うかが大切である。そして、保育者は安心して失敗できる環境を作ることが必要だと言われている。本研究は、造形活動の中での失敗した表現や下手な表現を豊かな表現の一部と捉え、どのように評価または受け入れるかを再度考え直し、失敗表現が新しい表現のきっかけになるのではないか、その可能性を考えていく。

第2章 研究概要

失敗表現の可能性について調査する本研究の調査は、大きく3つに分けられる。はじめに事前調査としてアンケートを実施し、どのような失敗表現があるか検討した。次に、失敗表現のワークショップを実施した。最後にワークショップ実施後、事後調査として、アンケートを実施した。最後にワークショップ後に失敗表現についてのアンケートを行い、その可能性を考察する。

そのため、第3章では事前調査の研究方法とその結果と考察、第4章ではワークショップの概要について、第5章では事後調査の研究方法とその結果と考察、そして、第6章でまとめを順に説明する。

倫理的配慮に関して、以下のアンケート調査は、大垣女子短期大学研究委員会の倫理審査会の承認を得て実施している。(R5-3)

第3章 事前調査の研究方法とその結果と考察

まずは、ワークショップを行うための事前調査として、どのような失敗が挙げられるか、幼稚教育学科の選択授業「造形表現の展開Ⅱ」で養成校学生にアンケートを実施した。対象となる学生は、保育実習と幼稚園教育実習を経験した3年次生23名とし、アンケートを実施、授業内で調査説明し、ワークショップ実施後、アンケートの回答を持って同意と判断することを伝えた。有効回答は23となった。

・アンケートの概要

始めに、幼稚教育学科学生に学生がこれまでに体験したり、想像する失敗表現についてのアンケートを実施した。①紙にクレヨンなどで行うお絵かき表現、②絵の具表現、③折り紙や色画用紙などで切ったり貼ったりする表現、④廃材などを使った立体表現の4つの表現それぞれについて回答してもらった。また、それらの失敗表現に対する、学生の考える失敗との向き合い方について調査するため、今後その失敗表現に出会った場合どのように対応したいかを聞いた。以下に質問項目を挙げる。

「表現の失敗についてのアンケート」

園での造形活動の中で、子どもの表現活動を見ていて、「この子のこの絵大丈夫か? どうなるのかなあ?」というような小さな困りや、実習で行った造形活動で、「これじゃあ指導案通りに終われないよ!」というような大きな困りなど、困りそう/困った!な経験があると思います。これをここでは「表現の失敗」と呼ぶことにします。以上をふまえ、次のアンケートに答えてください。

①子供たちと行う造形活動において、以下の活動の中で、これは困ったなあ、失敗だなあと思った表現を教えてください。

①-1 (紙にクレヨンなどで) お絵かきの表現の失敗

①-2 絵の具での表現の失敗

①-3 折り紙や(切ったり貼ったり) 色画用紙などを使った表現の失敗

①-4 廃材などを使った立体表現の失敗

②上の質問であげてもらったような失敗表現と、次に出会ったらどんな風に対応しますか? 考え付く限り書いてください。

・事前のアンケート調査の結果と考察

次に、アンケート調査の結果について述べる。上記のアンケートで、造形表現活動の中で、困りそう/困ったと感じた表現を失敗表現と呼び、①紙にクレヨンなどで行うお絵かき表現、②絵の具表現、③折り紙や色画用紙などで切ったり貼ったりする表現、④廃材などをを使った立体表現の4つの表現における失敗表現を挙げてもらった。挙げられた回答を分類し、表としてまとめた。失敗表現で挙げられた回答を分類していくと、失敗には3つの傾向が見られ「表①失敗表現の分類」に示した。一つ目は「素材特有の失敗」で、素材の特徴であり、それによって起こる困ったことである。例えば、クレヨンが力を入れすぎたため折れたり、絵の具に水を含みすぎて滲んだりする失敗がある。2つ目は、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」で子どもが失敗したと判断した失敗となる。3つ目が「保育者の意図と異なる失敗」で、ここでは、学生自身が実習で行って困ったことや、学生の目線で保育者が困ったと思ったこととして挙げられた回答がこれにあたる。以上の3つの大きな分類と個別の失敗を分類しそれぞれを比較した。

表①失敗表現の分類

a	素材特有の失敗
b	子どもがやりたいようにやれなかった失敗
c	保育者の意図と異なる失敗

次に、「表②-1 (紙にクレヨンなどで) お絵かきの表現の失敗」から説明する。アンケートでお絵かきの表現の失敗を挙げてもらった結果を表す、失敗内容による分類を見ると、「滲んだ」が4回答、「力を入れすぎて、破れる、折れる」、「塗りつぶす」、「紙が足りなくなる、はみ出す、移る」、「実物と異なる」がそれぞれ3回答となった。失敗表現の分類別の割合を見ると、「素材特有の失敗」が7回答、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」が6回答、「保育者の意図と異なる失敗」が6回答となった。

表②-1 (紙にクレヨンなどで) お絵かきの表現の失敗

▶失敗内容による分類		
失敗の分類	失敗の内容	回答数(割合)
a	滲んだ	4(17.4%)
a	力を入れすぎて、破る、折れる	3(13%)
b	塗りつぶす	3(13%)
b	紙が足りなくなる、はみ出す、移る	3(13%)
c	実物と異なる	3(13%)
c	予定と異なる過程、活動の意図が伝わっていない	2(8.7%)
c	真似る	1(4.3%)
-	なし	4(17.4%)
計		23(100%)

▶失敗の分類別の割合		
失敗の分類	失敗の分類	回答数(割合)
a	素材特有の失敗	6(26.1%)
b	子どもがやりたいようなやれなかった失敗	2(8.7%)
c	保育者の意図と異なる失敗	5(21.7%)
-	経験なし、回答なし、または無効回答	10(43.5%)
計		23(100%)

次に、「表②-2 絵の具での表現の失敗」を見ていく。失敗内容による分類を見ると、「色が混ざる」が4回答、「汚れる」が3回答、続いて、「滲む」が2回答となった。失敗の分類別の割合を見ると、「素材特有の失敗」が6回答、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」が2回答、「保育者の意図と異

なる失敗」が5回答となった。

表②-2 絵の具での表現の失敗

▶失敗内容による分類		
失敗の分類	失敗の内容	回答数(割合)
a	色が混ざる	4(17.4%)
c	汚れる	3(13%)
b	滲む	2(8.7%)
a	量が多い	1(4.3%)
a	紙が弱くなり破裂した	1(4.3%)
c	意図した活動にならなかった	1(4.3%)
c	難しすぎた/発達段階に沿わなかった	1(4.3%)
-	なし	10(43.5%)
計		23(100%)

▶失敗の分類別の割合		
失敗の分類	失敗の分類	回答数(割合)
a	素材特有の失敗	6(26.1%)
b	子どもがやりたいようなやれなかった失敗	2(8.7%)
c	保育者の意図と異なる失敗	5(21.7%)
-	経験なし、回答なし、または無効回答	10(43.5%)
計		23(100%)

3つ目は、「表②-3 折り紙や色画用紙など(切ったり貼ったり)を使った表現の失敗」を見ていく。失敗内容による分類を見ると、「完成しなかった、手順通りにやれない」が6回答、「ノリの量」が4回答、続いて、「ぐちゃぐちゃになった、破れた」が3回答となった。失敗の分類別の割合を見ると、「素材特有の失敗」が8回答、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」が0回答、「保育者の意図と異なる失敗」が7回答となった。

表②-3 折り紙や色画用紙など(切ったり貼ったり)を使った表現の失敗

▶失敗内容による分類		
失敗の分類	失敗の内容	回答数(割合)
c	完成しなかった、手順通りやれない	6(26%)
a	ノリの量	4(17.4%)
a	ぐちゃぐちゃになった、破れた	3(13%)
a	ハサミの使い方	1(4.3%)
c	お約束が伝わらなかった	1(4.3%)
-	なし	8(34.8%)
計		23(100%)

▶失敗の分類別の割合		
失敗の分類	失敗の分類	回答数(割合)
a	素材特有の失敗	8(34.8%)
b	子どもがやりたいようなやれなかった失敗	0(0%)
c	保育者の意図と異なる失敗	7(30.4%)
-	経験なし、回答なし、または無効回答	8(34.8%)
計		23(100%)

4つ目、「表②-4 廃材などを使った立体表現の失敗」を見ていく。失敗内容による分類を見ると、「材料が十分になかった」が4回答、「壊れた」が3回答、続いて、「道具・材料の管理」が2回答となった。失敗の分類別の割合を見ると、「素材特有の失敗」が9回答、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」が1回答、「保育者の意図と異なる失敗」が1回答となった。

表②-4 廃材などを使った立体表現の失敗

▶失敗内容による分類

失敗の分類	失敗の内容	回答数(割合)
a	材料が十分になかった	4(17.4%)
a	壊れた	3(13%)
a	道具・材料の管理	2(8.7%)
b	作りたいものと異なるものになった	1(4.3%)
c	時間配分	1(4.3%)
-	なし	12(52.2%)
	計	23(100%)

▶失敗の分類別の割合

失敗の分類	失敗の分類	回答数(割合)
a	素材特有の失敗	9(39.1%)
b	子どもがやりたいようなやれなかった失敗	1(4.3%)
c	保育者の意図と異なる失敗	1(4.3%)
-	経験なし、回答なし、または無効回答	12(52.2%)
	計	23(100%)

幼稚教育学科の学生（23名）に対して、アンケート調査を実施し、4つの表現（紙にクレヨンなどでお絵かき表現、絵の具表現、折り紙や色画用紙などで切ったり貼ったりする表現、廃材などを使った立体表現）に関する、失敗表現を挙げてもらった。その結果をそれぞれ考察していく。

お絵描きの失敗表現（「表②-1（紙にクレヨンなどで）お絵かきの表現の失敗）参考」を見ると、「滲んだ」や「力を入れすぎて、破れる、折れる」など、紙が破れたり、クレヨンが折れたりの失敗が上位にあげられている。また、子どもがやりたいようにやれなかった失敗として、塗りつぶしてしまったりなど、低年齢児が素材の特徴を上手くコントロールできずに失敗した表現と受け取ること

ができる。この失敗表現から、クレヨンが未満児から年少児が、はじめてのお絵かきの活動で最も使われる素材であると考えられる。

次に、絵の具表現（表②-2 絵の具での表現の失敗参照）を見ると、「色が混ざる」、「量が多い」、「紙が弱くなり破れた」など素材特有の失敗に分類される失敗表現が多く挙げられた。また、「汚れる」や「難しそうだ」などの保育者の意図と異なる失敗も多く挙げられ、絵の具の表現の幅の広さと、そのため多くの失敗が挙げられたのではないかと感じた。

3つ目に、折り紙や色画用紙などで切ったり貼ったりする表現（表②-3 折り紙や色画用紙など切ったり貼ったりを使った表現の失敗参照）を見ると、「完成しなかった、手順通りやれなかった」や「お約束が伝わらなかった」が3割以上となった。このことから、特に折り紙の活動が保育者が見本を見せたり、意図を伝えたりしながら表現を行う素材と言える。また、ノリの扱いについて、実習生の多くが失敗したと感じる傾向が見られた。

最後に、廃材などを使った立体表現（表②-4 廃材などを使った立体表現の失敗参考）を見ると、「材料が十分になかった」や「道具・材料の管理」など素材特有の失敗として、材料の準備や環境についての難しさが挙げられた。また、「素材特有の失敗」が9回答に対して、「子どもがやりたいようにやれなかった失敗」と「保育者の意図と異なる失敗」の分類は共に1回答づつで、子どもたちはやりたいように表現し、保育者は子どもに自由な表現をさせる傾向にある表現活動とも言える。「経験なし、または無効回答」も多いが、実習生が現場で行うことが難しいための回答の結果と言える。

表③ 失敗表現と次に出会ったらどんな風に対応しますか？に対する回答一覧

声掛け	もう一度やってみよう	済んでしまっても大丈夫だよ！綺麗な絵ができたね！！もう一度やってみよう！！
	褒める、アドバイスする	・見たものを言葉にして肯定的に伝えて、ここに描いた方が可愛いかもと伝える ・ソリで壊れた時は、何で壊れたのか？と、聞きもうちょっと少ないと壊れないよと伝える
	気にしない	済んで気にしない
	共感する	○○くんは完璧を作りたかったんだね、でも先生この絵好きだな、○○くんはどう思うかな？
	個人に合わせて	その子に合わせて対応する
	優しく伝える	・優しく貼るよう伝えれる。
	わかりやすい伝えかた	・子どもが分かる言葉で分かりやすく伝えられるようにする。 ・子ども自身の好きなものを聞いたりして、それを書いてみたらと言ってみる。
	感じたものを引き出す関わり	個別で聞き取り、何色に見える？や、答えを伝えるのではなく、できるだけ自分で感じたものを作らせたり、理解できるような関わり方をする。
環境設定	物を増やす	子どもたちの悪いに応えていく。 大きくできるよう物の数を増やす
	同時に活動する人数	1はもう保育者が気にしない、絵の具はパレットを増やす
	手拭きをおく	個人、個人ずつ行う人でできない子には手を添えて描く。 ・近くに手が触れるような雑巾などを置いておく。 ・絵の具が混ざるとどんな色になるのか予め子どもたちにペーパーサーツなどで伝えておく。もしくは、表情などを作っておく。
計画する	試作する	自分でやってみる。 年下や、他の子に意見を聞く。 先生に子どもの様子を聞いておき、対策を考える。
	説明を考える	作る過程をもっと細かくしてもらかったかなと思った。 ・蓮の葉の写真見せるなど、よりイメージを深められるように導入を工夫する。それでも赤色で塗る場合や違う色で塗る場合はそのまま認めつつ、色の理解がしっかりとあるか、色覚に異常が無いかについても観察していく。 ・皆で使うものなので、どのように使うと綺麗に使えるのかを見せながら伝える。
制作する	時間の設定を考える	何を作るか考える時間と作る時間を分けておく。
	一緒にやる	何を描いているのかな、や子どものことを知ろう理解しようとしている。 気持ちが満足するまでのまま描くのを見守る。 一緒にやってみる。
	手伝う	失敗を失敗と思えないようにカバーをする。 うまく出来ていても、大丈夫や保育者が子どもが納得するような作品になるように一緒に作ったり直したりする。

次に、さまざまな失敗表現を挙げてもらった後に、それらの失敗表現と次に出会ったらどんな風に対応するかを聞いた。上記「表③ 失敗表現と次に出会ったらどんな風に対応しますか？に対する回答一覧」を見ていくたい。この質問的回答を通して、失敗表現を学生がどう捉えているかを考えていく。回答を分類していくと、4つの大きな分類をすることができた。「声掛け」、「環境設定」、「計画する」、「制作する」の4つである。この4つに対して、回答し学生は以下の対応を考えている。声掛けでは、「もう一度やってみよう」や「褒める」など失敗を失敗と扱わないようにする声掛けと「わかりやすい伝え方」など失敗しないようにする声掛けが挙げられた。そのほか、「環境設定」と「計画する」は失敗しない工夫が挙げられ、「制作する」には一緒にやるなど、失敗を失敗と思えないようにカバーしようとする意見が見られた。

これらから考察できるのは、ワークショップまでの学生は自身の感じる失敗が起こらな

いようにしようとする工夫と子どもたちが失敗と思わないようにする工夫の2つを提案していることがわかる

・まとめとワークショップの作成について

以上のように、幼児教育学科の選択授業「造形表現の展開1」の中で、失敗表現に関するアンケートを行った。その結果、紙にクレヨンで行うお絵かき表現は、年齢によって使用される素材が違うため、低年齢児の失敗が多く見られる素材がある。絵の具表現は、多くの種類の失敗が挙げられ表現の幅が広いとが言える。折り紙や色画用紙などで切ったり貼ったりする表現の特に折り紙の指導は、見本に近づけるよう指導する素材は、保育者の意図と異なったという失敗が多く挙げられた。廃材などを使った立体表現は、その使用方法が定められておらず、どう使うか子どもが決める。そのため、計画の段階でしっかりと決めることができないため、自由な表現を子どもたちが挑戦することが可能な素材と言える。

ただし、素材特有の失敗も多かった。

そして、ワークショップ前の学生が次に失敗表現と出会ったらどう対応するかというアンケートの回答を見ていくと、2つの傾向があるように考えられた。学生または保育者が失敗と感じる失敗をさせないようにする工夫と、子どもが失敗と思わないように声がけするなどの工夫である。

これらのことから、たくさんの失敗表現を体験し、その上で失敗表現をどう楽しむかを考えることができるワークショップとして、絵の具を使った失敗表現を事前に行いそこから作品を作っていくとする造形ワークショップを作成することとした。

第4章 ワークショップの概要

第4章では、第3章のアンケート結果を踏まえ、たくさんの失敗表現を体験し、その上で失敗表現をどう楽しむかを考えることができるワークショップを制作し実施する。ワークショップは、本学幼児教育学科の授業(7/14)と大垣市の園での園内研修(7/21)で、それぞれ実施した。ワークショップの流れを説明する。ワークショップでメインとなる素材は絵の具とした。絵の具を使った失敗を事前に行いそこから作品を作っていく。失敗表現は、学生アンケートで挙げられた絵の具の失敗表現の中から3つの失敗表現を選んだ。実際に失敗表現をやってみて感想を話しながら、素材を楽しむワークショップを実施した。以下に造形ワークショップの実施状況を示す。

授業でのワークショップと研修会でのワークショップの実施状況を説明する。どちらも最初15分程度説明をし、60～70分の制作となるよう計画した。材料の用意と配布をスムーズにするため、どちらも5～6人程度のグループになってもらった。授業では4グループ、研修会は6グループとなった。授業では作業台の上で実施したが、研修園では床にブルーシートを敷き地面で制作した。

次にワークショップの流れについて説明する。以下流れとなる。

①導入：絵の具の失敗の紹介

- ・水の量の失敗
 - ・絵の具がついて汚れる失敗
 - ・混ざっちゃったり／混ざらなかった失敗
- ②失敗表現：水で紙を濡らそう
- ・まずは水だけ
 - ・霧吹きで紙を濡らそう
 - ・名刺カード、ポストカード、お花紙、色画用紙

③色水を作ろう

- ・ラップを敷こう
- ・カップに水を入れる
- ・絵の具を混ぜて色水を作る
- ・スポットでたらす

④失敗表現：たらす、にじむ、混ざる

- ・色水を紙にたらす
- ・2～3色たらす→にじむ
- ・2～3色、紙の上に絵の具を置く
- ・霧吹き
- ・紙を重ねる

⑤失敗表現：まぜる、泡と絵の具とボンド

- ・泡と絵の具
- ・カップにシェービングクリームを出す
- ・絵の具を混ぜる
- ・泡と絵の具とボンド
- ・カップにボンドを入れる
- ・紙の上に置く

以上のように、はじめに「①導入：絵の具の失敗の紹介」の中で、アンケートの結果を説明し、絵の具に関して、3つの失敗「水の量の失敗」、「絵の具がついて汚れる失敗」、「混ざっちゃったり／混ざらなかった失敗」を説明した。そして、失敗表現「②失敗表現：水で紙を濡らそう」を実施する。これは、水の量が多すぎて、紙が水分を吸いすぎて破れてしまうという失敗を体験する表現となる。霧

吹きを使い、さまざまな種類の紙に水を吹きかけ、それぞれの変化を観察する。紙がブヨブヨになったり、お花紙はすぐに溶けて破れてしまった。次は、「③色水を作ろう」という表現になる。カップに入れた水に絵の具を混ぜ、スポットでサランラップの上に水の球を乗せていく。そのままで綺麗だし、水の球が隣とぶつかり混じると色が混ざったりする。このまま、色水をサランラップの上ではなく、紙の上に垂らす表現にうつる。「④失敗表現：たらす、にじむ、混ざる」では、紙の上に垂らした色水が滲んだり、混ざる様子を観察した。次に「⑤失敗表現：ませる、泡と絵の具とボンド」となる。新しくカップに絵の具とシェーピングクリームをだし、よく混ぜたり、少しだけ混ぜ、混ざり切らない様子を観察した。最後は、色のついたクリームを参加者はアイスクリームなどに見立てて、見立て遊びを楽しんだ。

第5章 事後調査の研究方法とその結果と考察

第5章は、第4章で説明した、失敗表現を体験しその上で失敗表現をどう楽しむかを考える一緒に考えるワークショップを実施した後に参加者となる学生と保育者にそれぞれに実施したワークショップを通しての気づきを問う事後アンケートについて説明していく。

・事後のアンケート調査の概要

授業でのワークショップまたは、園内研修でのワークショップ後に参加者にその活動についてのアンケートを実施した。

アンケートは、前半は、5件法により、失敗表現のワークショップの感想を聞いた。(問い合わせ①) 最後に、それらの失敗表現に対する保育者と学生の考える失敗との向き合い方について調査するため、次に後半は、その失敗表現にを実際に行うためにどのような工夫が考えられるか聞いた。(問い合わせ②)

対象者は授業で参加した学生と、研修会で参加した保育者となる。アンケートの実施日時とその受付期間はワークショップを実施した日から1週間とした。有効回答は授業に参加した学生は計23回答、研修会に参加していただいた保育者は7回答となった。以下が質問項目となる。

失敗表現についてのアンケート

問い合わせ① 造形ワークショップで行った絵の具を使った失敗表現から始める造形活動について下記の質問に1~5段階で回答してください。

①-1 自分の思ったやりたい表現を実現することができましたか？

①-2 自分が思ったやりたい表現を実現するために、一度失敗をすることが役に立ちましたか？

①-3 自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しめたか？

①-4 自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しもうという提案で、制作に向かう気持ちは楽になりましたか？

①-5 子ども達と造形表現活動を行う際に、失敗表現を行ってみようと思いましたか？

②子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際に、どのような工夫が考えられますか？

・事後のアンケート調査の結果と考察（前半）

次に、アンケート調査の結果について説明する。アンケートの前半では、最初に制作するにあたり、こんなものを作ろうとかこんな

風に素材（今回のワークショップでは絵の具）を使ってみようなど、やってみようと思った表現を実現することができたかを聞いた（①-1自分の思ったやりたい表現を実現することができますか？）。次に、そのやりたいことを実現するためにワークショップ序盤で行った失敗表現が役に立ったかを聞く（①-2自分が思ったやりたい表現を実現するために、一度失敗をすることが役に立ちましたか？）。これは、失敗表現を行することで、やろうとしていた表現をやるにあたり、失敗しないようにできたり、失敗表現で見つけた偶然の表現を使って表した場合を想定している。そして、続けてこの失敗表現で出会った失敗のような

表現またはやろうとしていなかったができた表現を楽しめたか聞いた。（①-3自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しめたか？）4つ目に、やろうと思った表現ができなかったことがそのまま失敗になるのではなく、そこで偶然出会った失敗表現を楽しんでいいというメッセージで制作に向かう気持ちは楽になったか聞いた（①-4自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しもうという提案で、制作に向かう気持ちは楽になりましたか？）。この4つの問い合わせについて、挙げられた回答を表にまとめたものが以下となる。表は学生と保育者で分けてまとめている。

表④-1【学生】ワークショップ後アンケートの回答の値（N=23）

選択肢	自分が思ったやりたい表現を実現するため、一度失敗をすることが役に立ちましたか？		自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しめたか？	
	0	0	0	0
1(全く思わない)	0	0	0	0
2(思わない)	0	0	0	0
3(どちらとも言えない)	3	5	0	1
4(思う)	10	6	6	7
5(すごく思う)	8	10	15	13
平均値	4.24	4.24	4.71	4.57

表④-2【保育者】ワークショップ後アンケートの回答の値（N=7）

選択肢	自分が思ったやりたい表現を実現するため、一度失敗をすることが役に立ちましたか？		自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しめたか？	
	0	0	0	0
1(全く思わない)	0	0	0	0
2(思わない)	0	0	0	0
3(どちらとも言えない)	0	0	0	0
4(思う)	4	2	0	1
5(すごく思う)	3	5	7	6
平均値	4.43	4.71	5	4.86

はじめに、学生の回答結果である、「表④-1【学生】ワークショップ後アンケートの回答の値」をみると、問①-1の回答結果である「自分の思ったやりたい表現を実現することができますか？」について、3(どちらとも言えない)が3回答、4(思う)は10回答、5(すごく思う)は8回答となった。同様に、保育者の回答結果である、「表④-2【保育者】ワーク

ショップ後アンケートの回答の値」について4(思う)は4回答、5(すごく思う)は3回答となり、高い数値となった。平均値を見てもそうだが、高い結果となっている。これについては、学生に関しては、造形の授業を選択して履修してきている学生のため、前提として、制作することを好む集団とも言える。また、保育者の結果としても研修会でアンケ

トに回答していただいた方についても造形表現などへの関心が高い保育者と予想される。問①-2「自分が思ったやりたい表現を実現するために、一度失敗をすることが役に立ちましたか？」は、学生の回答結果は、3（どちらとも言えない）が5回答、4（思う）は5回答、5（すごく思う）は10回答となり、保育者の回答は、4（思う）が2回答、5（すごく思う）は5回答となった。やりたい表現ができたかと同様の平均値となった。制作が好きな人や造形に関心のある方が多いことも関係し、失敗表現をポジティブに受け取ってもらえた。問①-3「自分が思ったやりた表現以外の偶然の表現を楽しめたか？」について、学生の回答は、4（思う）が6回答、5（すごく思う）は15回答、保育者の回答は、5（すごく思う）は7回答となり、全ての質問の中で一番高い平均値となった。このことから、今回、失敗表現を楽しむワークショップは偶然を楽しむ環境となっていたと言えるだろう。また、失敗を楽しむ環境は、やりたいと最初に決めたこと以外の表現になんでも楽しめる環境だったと言えるかも知れない。続けて、問①-4「自分が思ったやりたい表現以外の偶然の表現を楽しもうという提案で、制作に向かう気持ちは楽になりましたか？」に関して、学生回答は3（どちらとも言えない）が1回答、4（思う）は7回答、5（すごく思う）は13回答となり、保育者の回答は、4（思う）は1回答、5（すごく思う）は6回答となった。他と同様、高い値となった。失敗してもいい=最初に思い描いた表現を実現させなくてもいいということが伝わったと思うとともに、最初に思い描いた表現を実現させなくてはならないというプレッシャーがあるのかもしれないという仮説を想像する。次に「表⑤ ワークショップ後アンケートの回答の値2」について説明する。アンケートの問①-5として、「子ども達と造形表現活動を行う際に、失敗表現を行ってみようと思いましたか？」と質問した。

表⑤ ワークショップ後アンケートの回答の値2

子ども達と造形表現活動を行う際に、失敗表現を行ってみようと思いましたか？

【学生】へのアンケート結果

はい	20
いいえ	1

【保育者】へのアンケート結果

はい	7
いいえ	0

およそ、全回答者30人のうち29人(96.7%)が失敗表現を行ってみたいと回答し、ワークショップについて良い評価、感想を抱いていることが確認できた。

アンケートの前半、失敗表現のワークショップの感想/評価について以下にまとめる。今回の参加者の多くは、制作が好きな集団と予想される。そのため、多くの人が、やりたい表現を実現できたと回答していると同時に、ワークショップの前に行った失敗表現がやりたい表現の実現に役に立ったと回答した。実現できなかったという回答者が、失敗表現を一度やってみることをどう受け取ったかの確認があればより確証を持ったデータとなるが、今回のワークショップとアンケートでは、失敗表現を一度やってみることがやりたい表現を助ける可能性があると言える。また、失敗表現をやることで偶然の表現にたくさん出会えた可能性を確認したとともに、最初にやりたいと思った表現でなくても失敗と決めてしまうのではなく、偶然の表現を楽しめた可能性がある。そのように、偶然の表現、失敗の表現を楽しむ環境の中で、参加者は、最初に考えた表現を実現しなくてもいいという自己評価の軸を得て、プレッシャーなく制作ができる可能性が示唆されていると考える。

・事後のアンケート調査の結果と考察（後半）

次に、今回のワークショップに参加した感想を五段階で評価してもらった後、実際の現

場で子ども達と行う造形活動で、失敗表現を取り入れる際の工夫を自由記述で回答してもらった。下記「表⑥-1【学生】子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際の工夫について回答の分類と一覧」と「表⑥-2【保育者】子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際の工夫について回答の分類と一覧」を見ていきたい。この質問は、実際にワークショップ

で失敗表現を体験した参加者の失敗表現への意見を自由記述であげてもらい、その評価を大きなカテゴリーで分類しながらまとめていく。分類については、事前アンケートで挙げられた、「声掛け」、「環境設定」、「計画する」、「制作する」の4つを中心に分類し、その他に当てはまらないものがあれば、分類を増やしていく。

表⑥-1【学生】子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際の工夫について回答の分類と一覧

a	声掛け	失敗も作品と言葉をかける	失敗も作品という言葉をかけたい 偶然は奇跡だ!2度と同じのはできないからどんどん新しいのに繋ろうと声をかける
		楽しかった表現方法を聞く	失敗しても表現が楽しかったらしいのだということを伝える。楽しかった表現方法を聞く。興味を持って貰えるような伝え方をする。
		素材の特徴を伝える	水を吹きかけすぎると、しなくなってしまうので紙の密度を知って、水は何回まで吹きかけていいよ!と声をかける
		大丈夫だよと伝える	子どもがやりたいと思う素材をあらかじめ用意しておき、それを失敗しても大丈夫と言葉かけをしながら失敗表現を楽しむ。
		失敗しても良いと思えるように	失敗することが嫌の子もいるので、失敗した時にそれを決かける何かに持つていいいるようにすることが大事だと思う。また、失敗しても良いと子どもが思えるような言葉かけをすることも大切である。
		面白いねと声掛けする	面白いねその色や、「どうやってやつたらそうなったの?」と声をかけて、失敗も面白く、学びがあるように工夫する。
b	環境設定	失敗しよう	いつもは失敗と思っていることでも、楽しんでやることで子どもたちの失敗についての考え方を変えるかもしれない、積極的に失敗しよう!と声をかけて行なう。
		多くのパターンができるように環境設定	カップを多く用意いろいろな色が作れるようにし色に興味を持ってもらう。
		失敗も想定した材料の準備	実際に、瓶を実習で花火づくりで失敗経験だったので材料を沢山準備し個性溢れる花火作りができるならと思う。偶然にできた形や色から個々の個性が花火になるような材料を準備したり、面白い!あまり使わないから面白い!と思ってもらえるようなものを活用するといいなと思いました。
		大胆に失敗できるようにシートを敷くなどする	失敗表現の中に水をたくさん使うことが多かったので、濡れてもいいように、大胆に失敗できるように、新聞紙やビニールシートを敷いて環境を整える。
c	計画する	自由に使える素材や空間を作る	自由に使える環境を作る
		いろんな失敗ができる環境を作る	たくさんの事ができるように様々な素材や、色を用意することが大切だと思う。 たまたまできた色や形をすごいと言えり呼び掛けや環境作りが大事だと思。
		共に考える時間を作る	上手いから悪い間に思った時に、どうして上手いからかかったのかと一緒に考える時間を作り、共に理解できるようにする。
d	制作する	失敗を実際にやってみる	これは失敗だからこうならないようにしようという体で活動をするのではなく、素材で遊んでみようという活動のなかで水をどの位かけると紙が破れたんだと気付けるやり方がより楽しく学べると思いました。 子どもと一緒にした失敗になってしまったのかやつてもらうことで理解しやすい。 色を沢山使ってしまふらふらなど今までやってみて綺麗な色になるか汚い色になるか子どもたちに感じてもらら。
		失敗で制作を続けてみる、実験してみる	失敗でも作品にすることができるように、水に濡れて紙が破れたなら、それをほかの画用紙に貼ってみたらどうなるのかっていうのをやってみたりするのもいいのかなって思いました。(私が破ったものを貼ってみて思ったことです。)
		自由に制作させる	自由に表現をさせる。
		一緒に使う	実際に子どもたちと一緒にいろいろな方法を行い、自分がやりたい表現が行えるように、声かけをし、楽しむ。
e	評価軸を増やす	ヒントだけ提示する	何か色の例などを出すのではなく、こんなふうにやると言ふことだけ伝えて、子どもたちの感性に任せて初めて行なってみる。
		楽しむ視点を変える	楽しむ視点を変える
		明日どうなってるか見てみよう、どんな工夫があるか考えよう	失敗が次の日どうなっているのか、見てみよう!と促し、うまく成功しているかもしれないことを伝える。 今度は、少なくてみようなど工夫して伝えてみて2回目もやってみてどうなったかんじでもらえるようにする。
		失敗を偶然できた表現として捉える	失敗を偶然に変えられるような考え方をしておく。

表⑥-2【保育者】子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際の工夫について回答の分類と一覧

【保育者】子ども達と造形表現活動で失敗表現を行う際に、どのような工夫が考えられますか?

a	声掛け	自己肯定感を持たせる	子どもに自己肯定感を持たせる言葉がけ
		「まーいっか」と伝える人	「やっちゃんたー、まーいっか」が大切。 「まーいっか、おもしろいし」の保育者でいたいです。
c	計画する	活かす見本を作る	子どもの造形表現をいくつか予測し、その表現が生きるような見本を作っておくとよい。
		その時の想いや感情、感覚で楽しむ	出来上がりや完成するときに捉われず、感覚やその時の想いで楽しむ
d	制作する	制作過程で失敗して見せる	子どもがこうなったらどうしようかと不安になりそうな過程で、あえて失敗した所を見せてることで子どもたちが失敗に対する不安を感じず、伸び伸びとできるようになります。また失敗の仕方の中ではなく、何パターンかで失敗の様子を見せて、こんなことが起きても大丈夫なんだということを知らせていくようにする。
		一緒に失敗する	保育者も一緒にやって子どもたちと失敗表現を行っていく。

まずははじめに、学生の回答一覧である、表⑥-1を見ていく。「声掛け」と「制作する」について、失敗を面白いねと声掛けしたり、制作の際に失敗しようと提案したりしたいなど、失敗を実際にやってみたいという意見があり、直接的に失敗を楽しもうとする意見が多く挙げられた。また、「環境設定」では、現場の保育者よりも、実践の経験が少ない学生の方が意見を出しやすかったようでたくさんの意見が集まった。失敗を楽しむために、素材をたくさん用意することや、汚れなどの対策としてシートを敷くなど、失敗表現の失敗を無くしたり、失敗と見せないような工夫をすることで、失敗表現を楽しむことを、直接伝えるのではなく、間接的に伝えるような意見が挙げられている。その他に、学生の回答では、回答に具体的な例があるのではなく、「評価軸を増やす」に分類したような、視点を変えるという意見や失敗を偶然に変えられるような考えをするなどの意見が挙げられた。一方、保育者の回答一覧である表⑥-2を見ていく。「声掛け」では、子どもがやりたいことをやれなかった場合に、自己肯定感を持たせるような言葉掛けをするなど、より実践的な意見があげられている。当然のことながら、学生の意見と比較すると、現場の保育者の意見の方が、より具体的で、どうしたいかがはっきりとしている。「環境設定」では、間接的な援助というよりも、直接的な言葉掛けや考えを持った人的環境である保育者でいたいという意見が挙げられている。「制作する」では、あえて失敗を見せるや一緒に失敗をするなど、失敗表現を肯定的に捉え、直接的に伝えようとする姿勢が見られる回答が挙げられた。

最後に、まとめとして、学生の意見（表⑥-1）と保育者の意見（表⑥-2）を比較してみと、大きく2つのことが言える。1つ目は、「声掛け」と「制作する」の直接的な援助が中心となる場面では、学生も保育者も、失敗表

現について肯定的に捉え、失敗を促したいと意見している。さらに保育者の意見では、失敗を肯定することで、子どもに自己肯定感を持たせるというより具体的な意見が出ている。これらのことから、子ども達に對して、失敗を楽しむことを直接伝えることが、造形活動においても、子どもの心の育つにおいても大切であるという意見が多かったと言える。2つ目、「環境設定」と「計画する」の間接的な援助の場面では、特に素材についての失敗表現を楽しむための意見がたくさん挙げられた。このことから素材研究の時間をとり、素材の理解をすることが求められる。

第6章 まとめと今後の展望

本研究は、失敗表現の可能性についての考察である。調査は、はじめに事前アンケートで失敗表現にはどのようなものがあるのかの一例を調査した。その結果、お絵かき表現は、年齢の低い子どもの失敗が多く挙げられ、発達段階により失敗表現に差があるのではないかという示唆があった。また、絵の具表現では、幅広い表現が可能な素材は、多くの種類の失敗表現があるのではないかという示唆があった。それとは対照的に、見本通りに作る折り紙での活動では、素材の特徴による失敗よりも、子どもがやりたいようにやれなかった失敗や保育者が意図と異なることによる失敗が挙げられ、一斉に見本通りに行う造形活動では自由な表現とは異なる工夫が必要なことが確認できた。最後に、廃材などを使った立体表現では、廃材というどのように使うか子ども達の自由な発想による素材では、子ども達が自由にいろんな発想で制作できることと、そのために子どもがやりたいと思った表現にならないと感じることも多いだろうことが予想できることが示唆された。また、失敗表現へ対応の仕方についての調査

では、大人が失敗と感じる表現とならないような準備や工夫をすることと、子どもが失敗と思わないような声掛けを考えていくことがいいのではないかという工夫が考えられる。

次に、以上の事前アンケートの結果をもとに、失敗表現を制作する前に実際にやってみて、その失敗を楽しむワークショップを行い、事後アンケートを実施した。その結果、失敗表現を一度やってみることが、その後作る作品への表現を助ける可能性があるという示唆が得られた。また、失敗表現を実際に行う時に、偶然にさまざまな表現に出会えた可能性を確認したとともに、それらの経験が、作りはじめに、こうしようと思った表現ができなくても、その制作が失敗してしまった決めてしまうのではなく、偶然出会った表現を楽しみ、その体験が作品を作っていく可能性も示唆した。このように、失敗の表現を楽しもうとする環境の中で、制作者は、最初に考えた表現を実現しなくてもいいという自己評価の軸を得ることで、こうしなくてはいけないというプレッシャーなく制作ができる可能性があるのではないかと考えられる。また、最初にやろうとした表現にならなかったことを失敗としないという考えは、最初に考えたことが成功ではない可能性があることを認めることができるということも言える。これが上手い・下手の評価軸以外の考え方を持つ第一歩ではないかと考える。さらに、失敗表現を取り入れる際の工夫について、2つの示唆を得た。1つ目は、子ども達の表現を失敗で終わらせない言葉掛けは子どもの自己肯定感を持たせる心を育てることにつながるのではないかということだ。また、2つ目は、保育者はどのような特徴があるのか、どのように使うと良いのか、安全な使い方についてなど、日々、素材研究が必要だが、活動の環境の設定や計画するために、その素材を使う時には、どのような失敗があるのか、またその失敗表現を活用するにはどんなアイディアがあるか

などより深い素材理解が求められるということである。

以上のように失敗表現には、素材の特徴による失敗、年齢・発達段階による失敗、子どものやりたいことによる失敗、大人の意図することと異なる時に起こる失敗など、さまざまな要因があることがわかった。また、今回の研究では、失敗表現を表現活動の前に実際にやってみたら肯定的な評価が多く、失敗を失敗で終えるのではなく、その表現をポジティブに受け止めることで、「豊かな表現」を楽しむことができると言えるだろう。「子どもがやりたいことを100%受け止めて、創造性や個性を伸ばすアート教育入門」の著者パパンダ氏³⁾は、「もしも子どもがつくっている作品の中に色々と気になるところがあつても、まずは何でも受け止めて、どうしてそう表現したのかを聞いてコミュニケーションすることで、子どもが何かを思いつき新しいアイディアを加えることがあります。時間もかかるし手間もかかります。」と述べている。失敗表現が次の新しい表現に繋がることを示唆するとともに、それには時間と手間がかかるこことを同時に指摘している。そのため保育者は、失敗を肯定的に受け止める言葉掛けや、素材ごとにどのような失敗が想定されるのか研究していくことが課題であると言える。

参考文献

- 1) 幼稚園教育要領 文部科学省
- 2) 鈴木光男：表現する教室の作り方、東洋館出版社、2022、17.
- 3) パパンダ：子どもがやりたいことを100%受け止めて、創造性や個性を伸ばすアート教育入門、セルバ出版、2022、48.

若年消費者啓発のための産学官連携プロジェクト —「買輩革盟（バイヤーカクメイ）」の活動による効果と学生の学び—

The Industry-Academic-Government Collaboration for Young Consumers' Awareness

茂木 七香
Nanaka MOGI

1. はじめに

大学と地域との連携については、多くの大学で様々な取り組みが行われており¹⁻³⁾我が国では「2004年の国立大学法人化を機に、各大学で特徴強化の一環として、地域との関係を再構築する動きが盛んになった」といわれている⁴⁾。大垣女子短期大学（以下、本学）でも2011年の文部科学省の「質の高い大学教育推進プログラム（教育GP）」の採択を機に、「地域の子育て施策を活用した教育方法の改善—大垣市との連携による子育てサロンの運営を通じた体験学習—」に全学で取り組んだ⁵⁾。筆者は当時、教育GP専門部会の部会長としてこのプログラムに携わっており、各学科から選出された部会員を中心として各学科の学生が大勢参加する様々な活動が行われた。このプログラム終了後、現在も継続されている活動もあるものの全学的な取り組みには至らず、個別の授業や教員単位での取り組みに留まっている。

産学官で地域連携を行う際、連携先の企業や自治体が大学に求めるものとして、連花⁶⁾は①教員の研究分野での連携、②人材やアイディアの不足を教員や学生がまかぬ事業連携および教育連携、③大学の持つ資源・資産の活用を挙げている。筆者が2022-2023年度の本学地域連携推進委員長の立場で把握している中では、本学における近年の地域連携活動に関しては②が多いようである。これ

は本学の学科構成（幼児教育、デザイン美術、音楽総合、歯科衛生）が実践的な内容であり、地域社会に活かしやすいためだと思われる。

そんな中、本学の学科特性や専門性ではなく、大学生という属性、つまり「若者」であることを理由に依頼を受け、産学官連携プロジェクトにまで発展したのが「買輩革盟（バイヤーカクメイ）」である⁷⁾。本稿では、2021年の依頼後に発足し3年目を迎えたこのプロジェクトの設立までの経緯や活動内容を振り返るとともに、プロジェクトに携わった学内外の人々への質問調査の結果を通してこのプロジェクトによる各方面への効果と学生たちの学びの内容を明らかにする。

2. 買輩革盟プロジェクトについて

（1）プロジェクト発足までの経緯

2022年4月1日に成年年齢が18歳に引き下げられるに伴い、若年消費者トラブルが増加することが予想されていた。本学でもターゲット年齢である学生への啓発のために、2021年5月に1年次生対象の「教養・キャリア基礎演習Ⅰ」の授業に大垣市の出前講座としてまちづくり推進課からゲスト講師を迎えた。講師および大垣市の担当者から「若年消費者啓発の取り組みを学生と一緒にを行うことはできないか」という打診があった。これを受けて手始めに本

学学生を対象に消費者トラブルに関するアンケート調査を実施した⁸⁾。

アンケートの結果、消費者トラブルを経験したことのある学生は1%、聞いたことがあると答えた学生も10%未満であり、学生たちが当事者になりうる身近な問題としての注意喚起の必要性を実感した。アンケートの結果をフィードバックすると同時に大垣市との取り組みへの参加者を募ったところ4名の学生が手を挙げたため、2021年9月に第1回のミーティングを行った。ミーティングには大垣市まちづくり推進課の担当者2名、(株)大垣ケーブルテレビの担当者1名、そして本学からは学生4名と教員1名(筆者)が参加した。

(2) プロジェクトのこれまでの活動

第2回目のミーティングで若年消費者をトラブルから守るための取り組みを協働して行うという趣旨が共有され、プロジェクト名を考案した。話し合いの中で学生たちから提案された名前が「買輩革盟」(バイヤーカクメイ)である。それぞれの文字に込められた思いと学生がプロジェクト名に基づいて作成したロゴマークを図1に、そして月1回~2回のペースで本学にて開催されたミーティングの様子やこれまでの活動時の写真や作成物などを表1、図2~図7に示す。

2022年2月に大垣市、(株)大垣ケーブルテレビ、本学の3者で連携協定を結んだが、これは本プロジェクトの活動に賛同した大垣市からの提案により実現したものである。表中「買輩革盟キャラクターのお名前大募集」は2023年12月現在募集期間であり、2024年1月中旬に名前を決定した後、発表とともにプロジェクトのPRを行う予定となっている。

活動の周知という面では、一年次生の必修科目である「教養・キャリア基礎演習Ⅰ」の授業で大垣市役所出前講座の消費生活講座を実施する際に本プロジェクトの発足の経緯と

取組内容を紹介する時間を設けており、学生にも浸透してきている。この時にプロジェクトで作成した若年消費者啓発のイラストや連絡先の入ったクリアファイルを毎年全員に配付しており、その後学生が教材整理時に使用している姿をよく見かける。また、学外イベントへの参加以外にも本学学生を対象とした標語募集や名前募集などを行い、応募をきっかけに活動内容を知ってもらう機会を作っている。発足から3年間の間にプロジェクト運営メンバーとして本学からは学生9名(うち4名は既卒)と教員1名(筆者)が参加している。新メンバーの募集については「騙されないぞ~標語」の受賞者が応募をきっかけにメンバーに加わったり、筆者が担当授業でプロジェクトの取り組みを紹介した際に興味を示した学生が参加したりと、活動自体がメンバー獲得に結び付き、継続に繋がっている。

3. 質問調査の実施

プロジェクトの活動も3年目で学内外に周知され定着してきており、イベントへの参加者数や参加者の声からは有意義な取り組みであることが窺える。そこで、実際にどのような効果があったのか、そして参加した学生たちにとってプロジェクト参加がどのような経験となったのかを明らかにするために、質問調査を実施することとした。また、活動に参加した大垣市や(株)大垣ケーブルテレビの関係者にも取り組みへの成果や課題を尋ね、今後の地域連携活動にも活かすこととした。本研究の実施については大垣女子短期大学研究委員会の倫理審査にて承認されている(承認番号R5-5)。

(1) 質問調査の内容

① 学生向け質問調査

表1 買輩革盟(バイヤーカクメイ) プロジェクトのこれまでの活動

実施時期	実施内容	詳細
2021年5月	大垣市からの取り組み参加への打診	大垣市出前講座による消費生活講義実施後に若年消費者啓発のための取り組みへの本学学生の参加を打診された。
2021年6月	学生への消費者トラブルに関するアンケート実施	大垣女子短期大学の学生を対象として、消費者トラブルの経験や意識を尋ねるアンケート調査を実施するとともに、取組に参加する学生を募った。
2021年9月	第1回ミーティングの実施	大垣市、(株)大垣ケーブルテレビ、大垣女子短期大学のメンバーが集まり、第1回目のミーティングを行った。
2021年10月	買革革盟の立ち上げ	プロジェクトの趣旨や目的を共有した上でプロジェクト名を決定し、ロゴを作成した。
2022年1月	成人式での消費者クイズ	成人式に参加する若者向けに消費者クイズを作成し、成人祝いのイフリストとともに上映した。
2022年2月	3者連携協定の締結	大垣市、(株)大垣ケーブルテレビ、大垣女子短期大学の3者で「若年層消費者啓発に関する連携協定」を結んだ。
2022年3月	啓発用クリアファイルの作成と配付	若年消費者啓発用のクリアファイルを学生のアイディアとデザインにより作成し、大垣市内の全ての高校3年生に配付した。
2022年9月	アクアウォークでの啓発イベントへの参加	大垣市主催の消費者啓発イベント「楽しく知ろうよ！消費生活」に参加し、消費生活アンケートの実施や消費啓発グッズ配付の担当を行った。
2022年12月	「騙されないぞ～標語」の募集	大垣女子短期大学の学生を対象として消費者啓発標語の募集を行った。
2023年3月	啓発用クリアファイルの作成と配付	「騙されないぞ～標語」の入賞作品をもとに学生たちがアイディアを出し、クリアファイルを作成して大垣市内の全高校3年生に配付した。
2023年9月	イオンモールでの啓発イベントへの参加	大垣市主催の消費者啓発イベント「楽しく知ろうよ！消費生活」に参加し、買輩革盟の活動を紹介した。
〃	まちなかスクエアガーデンへの出展	大垣市商店街振興組合連合会主催の「まちなかスクエアガーデン」で「消費者啓発強化月間PRブース『オリジナル缶バッジを作ろう！』」を出展した。
2023年12月	買輩革盟キャラクターのお名前募集	大垣女子短期大学の学生を対象として、学生が作成した本プロジェクトキャラクターの名前の募集を行った。



買 … ワカモノ消費者
輩 … 仲間
革 … 意識改革
盟 … 誓い合った同志

図1 買輩革盟（バイヤーカクメイ）のロゴマークと名前の由来



図2 学内でのミーティングの様子



図4 2022年9月アクアウォークイベントの様子



図6 2023年9月まちなかスクエアガーデンの様子



図3 2022年に作成したクリアファイル



図5 2023年に作成したクリアファイル



図7 お名前募集中のプロジェクトキャラクター

昨年度から活動に参加している学生（3名）と1～2年目に参加した卒業生（4名）を対象に、活動参加のメリットやデメリット、正課内外の他の場面への波及効果などについて尋ねる質問紙調査を実施した。質問は記名ありで実施し、回答方法は記述式とした。質問項目は、奥田⁹⁾がコロナ禍で大学生たちが地域イベントに参加した際の感想から抽出した内容を参考に作成した（質問項目は表2～3中参照）。

② 企業・市役所関係者向け質問調査

本プロジェクトの活動への参加者や関連部署に所属し活動内容を把握している株大垣ケーブルテレビと大垣市の関係者を対象に、学生が本活動に参加することに対する意見や今後の要望などについて尋ねる質問紙調査を実施した。質問は記名ありで実施し、回答方法は記述式とした。（質問項目は表4～5中参照）

（2）実施方法

学生向け質問調査はGoogleフォームで作成し、そのリンク先を筆者がメールあるいは郵送にて該当学生に送り、回答を依頼した。企業・行政関係者向け質問調査もGoogleフォームで作成し、企業担当者には筆者がメールでリンク先を送った。市役所関係者には買収革盟のメンバーの代表者に筆者からリンク先を送り、本調査の対象者の選別と回答依頼を委ねた。調査期間は2023年11月24日～12月11日の2週間程とした。

（3）結果

学生向け質問調査への回答は7名から寄せられ、回答率は100%であった。企業・市役所関係者向け質問調査には企業関係者1名からと市役所関係者11名からの回答が寄せられた。それぞれの質問調査の回答を質問項目別に並べ、回答内容を読んでいくつかのカテゴリーに分け、表にまとめた（表2～5）。

1) 学生向け質問調査の結果

過去のボランティア参加の有無を尋ねたところ、あり3名、なし4名であった。プロジェクト参加の動機、参加のメリットとデメリット、参加して学んだことへの回答を表2に示す。プロジェクトへの参加を通して、もともとの目的である消費者啓発の内容だけでなく、運営の手法やコミュニケーション面など幅広い学びが挙げられた。次に、プロジェクト参加で変わったこと、地域イベント参加時の感想、3者連携の意義について尋ねた結果を表3に示す。自分自身が変わったこととしては、対応力や責任感などプロジェクト以外の場面への波及効果が窺える。実際に町中に出て行ったイベントについては、市民との関わりによってプロジェクトの意義を実感した様子であった。3者連携の意義については、実際に3者でのミーティングの場面に参加したからこそ気づきである多角的な視点や可能性の広がりについて言及されていた。

2) 企業・市役所関係者向け質問調査の結果

まず始めにこのプロジェクトへの考え方を幅広く尋ね、以前と比べて変わった点についても聞いた（表4）。直接関わりのない関係者も多いため、どのような印象を持たれているか不明であったが、若年者が当事者として携わっていることへの肯定的意見が多くみられた。以前からの変化については、一番の目的である若年者への啓発が向上したという意見が多く、プロジェクトを始めた目的が達成できていることが窺える。今後本学がどのように関わって行けるかを尋ねると、さらなる協働プロジェクトの具体的な内容や、大学の特性を生かし大学全体で取り組むなどの意見が寄せられた（表5）。このプロジェクトに対する企業や市役所からの期待が伝わってくる。

4. 考察

本プロジェクトのこれまでの活動を振り返り、関わった人たちへの質問調査をまとめた

表2 買輩革盟に参加した学生向け質問調査の結果（1）

質問項目	カテゴリー	具体的な回答
参加した動機	貢献への意欲	自分にできることがあったらお手伝いしたかったから
	消費者問題への関心	自分もクーリングオフで悩んだ経験があったから
		自分自身興味があったから
		活動を通して知ったことが今後に生かせるから
	専門性の活用	専門のデザインを通じて伝える経験をしたかったから
参加したメリット	他学生との交流	他の学生と交流したかったから
	他者との交流体験	色んな人と関われたこと・色んな人達に出会えたこと
		社会で働いている大人たちと活動できたこと
		他の学科の知り合いが出来た
	消費者啓発	今までの「聞く側」ではなく「話す側」に立って考えることで、聞いてくれる人たちはもちろん、自分自身の消費者意識も強めることができたこと。 (自分自身のクーリングオフで悩んだ) 当時の気持ちがあるので説明しやすく、理解もされやすい
参加したデメリット	専門性の活用	自分のデザインやイラストが役に立つ経験ができた。
		自分でチラシのデザインが出来たし、内容も実践的だったから
		ファイルやマグネット等の制作に得意分野を活かすことが出来た
参加したデメリット	時間的拘束	帰りが遅くなった・予想以上に時間を取られた・会議が長引いた 少し時間は取られるが負担にならない程度
	強制力	ミーティングを休みづらかった・頼まれたことを断りにくかった
プロジェクトに参加して学んだこと	消費者啓発	消費者問題について（リボ払いはやめた方がいい、など） 自分含め、一般人の消費者としての意識の低さ 騙されたというニュースばかりが目立つが、実際には、ただ知られていないだけで、対策などもたくさん存在しているということ。 (クーリングオフできず) 苦しかった気持ちをどう人に伝えるか、どうしたら同じ繰り返しを別の人人がしないようにできるかを分かりやすく伝えること
		提案、企画、実行などの重要性を知れた
		1からグッズやイベントを考える時の流れ
		会議で意見を出したりまとめたりすることの難しさ
	発信力	自分の意見を相手に分かり易く伝えることの重要性
	社会経験	社会の厳しさを実感した。人と人との関わりも大事だけれど、企業だとか団体同士での兼ね合いも必要だとか、難しい事について考えることがあった。
		社会と自分たちとのつながりを知ることができた

表3 買輩革盟に参加した学生向け質問調査の結果（2）

質問項目	カテゴリー	具体的な回答
プロジェクトに 参加して 自分自身が 変わったこと	消費者啓発	ネットショッピングする時に出品先を確認するようになった
		今まで以上に大きな買い物をするときは特に、きちんと吟味をしてから決めようと思うようになった
		もし知人が消費者関連で迷っていたり困っていたら、ここで知った知識を教えてあげたいと思うようになった
	対応力	仕事量が増え、他の課題や提出もあったので個人的なスケジュールを組んだりして時間の大切さを理解した
		提案、企画の際、積極的に意見を出せるようになった
		臨機応変に対応する力がついた
	責任感	自分の仕事に責任をもつという意識が身についた
	地域交流	この地域の人と密接に関わることは今までなかったし、地元にいたときも、ここまで近くで活動することはあまりなかったため、「あたたかいなあ」と思った。
		小学生あたりの子たちが来ており、そこで親も来るので親を中心に話をした。個人的に高校生のときに実際に被害になったので中高生のスマホやPCを持つ子供が来てくれる様にしたかった。
		地域イベントに参加することが好きなので、楽しかった。参加した方の顔が直接見えるのもいいと思う。
地域のイベントに 参加した時の感想	社会経験・社会との つながり	今まで体験したことないことばかりで緊張したけどいい経験になったと思う。
		大きな取り組みに関わっているのだと改めて実感が沸いた。
		実際に外に出て発信をすることで活動を実感でき、達成感を感じた。役に立つ事をやっていることを誇らしく感じた。
	就職への意識づけ	自分はどのような仕事が向いているのか、考える切っ掛けにもなった（人と直接関わるのが好き）。
学生、地元企業、 大垣市が 協働することの意 義	多くの対象者への 働きかけ	より多くの年齢層に消費者問題について知ってもらえる。 地元で、騙される・誤る人を少しでも減らすためには、多方面へのアプローチが必要だから
	多角的な視点	多くの目線から現状を考えることが出来る・視野や引き出しが増える
		地元の中高生が被害に合い、精神的不調に繋がることを防ぐため協同して守る必要があるため
	可能性の広がり	それぞれが自分達だけでは無理な、夢みたいなことヲ実現し体験できるのがいいところではないか
	広報	互いの知名度向上

表4 買輩革盟の企業・市役所関係者向け質問調査の結果（1）

質問内容	カテゴリー	具体的な回答内容
このプロジェクトへの考え方	若年当事者が参加することの意義	若年消費者と同世代の大学生が当該プロジェクトに参加することで、啓発活動に係る訴求力の向上が図れている。 若年層の当事者となる学生からの提案で、啓発グッズを作成したり、そのデザインを大垣女子短期大学のデザイン美術科の学生が自ら行うなど、このプロジェクトから若年層への消費者啓発に大きな影響を与えていたものと思う。 若年層に対しての啓発を同世代の視点・発想で取り組んでいることは良いことである。 若年世代自ら啓発活動を行っていることが意義深いと思います。 成人年齢が18歳になり、同年代の人に関心を持つてもらえる活動と思う。 啓発の当事者である学生から意見を聞くことができ、若年層向けの消費者啓発について理にかなっていると思う。
		若年層に向けた消費者啓発事業について、行政だけが実施するのではなく、学生が携わることで当事者の視点を反映できるため、非常に有益なプロジェクトだと感じている。
		今回の若者向けの消費者啓発は、行政が考へて実行するだけでは、若者は見向きもしません。同じ若者が啓発を行うことで、少しでも興味を持った若者が増えるようになればと思います。
		デザイン学科の学生の参加で、チラシ・グッズなどの作成において、より効果的な啓発活動が実施できていると思われる。
		行政、学生、メディアが一体となって取り組むことで、それぞれの役割を果たし、うまく機能できている組織となつたと思う。
		情報を発信することに長けている大垣ケーブルテレビが参加しており、若年層向けの消費者啓発について理にかなっていると思う。
	3者それぞれの特性の発揮	広報専門の事業者のアドバイスを受けられることで効果的な啓発手法を政策に反映できるため、非常に有益なプロジェクトだと感じている。
		三者が各々の強みを生かし、若年層が消費者の権利や責任について学ぶ機会の創出に寄与しており、意義がある取り組みだと感じている。
		メディアが参画することによって、見せ方・伝え方なども考慮されていることも良いと思う。
		産学官でプロジェクトを推進できることは、地元に大学（短大）がある地域でしかできないことです。そして民間広告企業が、広報などのお手伝いする。それぞれの得意を活かした形が良いことだと思います。
	広報効果	消費者トラブルを知つてもらえる機会になると思う。 若年層の被害防止に役立っていると思う。
	肯定的意見	若年者への消費者啓発はぜひ継続していただきたいと思います。 行政と若者とで取り組むことは良いことだと思う。
以前と比べて変わったこと	啓発方法の向上	民間・学生各々の視点を踏まえた活動ができるところから、市単独かつ数名の担当者で検討・実施するよりも量・質ともにより効果的な啓発が実施できている。 我々大人世代では思いつかないような企画や今の若者の流行りなどの意見を取り入れることができた。 従来のチラシを配る啓発から、キャラクターが直接注意喚起を促すイラストや、学生が出演する映像による啓発など、若年層消費者に伝わりやすい手法のアイデアが増えた。 行政からだけの啓発とは違い、協働プロジェクトで活動することで、様々なアイデアが出る。
		行政職員では思いつかない様々な啓発のアイデアが生まれ、また形にすることことができた。
		従来の消費者啓発は、ほとんどが高齢者を対象としていたが、若年層にも啓発活動を取り組むことができた。
		2022年4月の成人年齢の引き下げがだんだん浸透してきたように思う。
	若年当事者との関わり	プロジェクトに携わる学生を通じて、若者消費者の声を直接聞くことができるとても貴重な機会が増えた。 企画、デザインなど新しい啓発グッズなどができる、イベントに一緒に参加して関わりができたこと。
	考え方の変化	異なる立場の方たちから様々な意見を交換することができ、視野が広がった。 行政で考えると、どうしても堅いイメージのものになってしまいがちであるが、行政側も柔軟な考え方をするようになった。 仕事ではなく、ボランティアとして楽しく参加する学生を見て、「行動する=仕事」の思い込みを反省することができた。

表5 買輩革盟の企業・市役所関係者向け質問調査の結果（2）

質問内容	カテゴリー	具体的な回答内容
大垣女子短期大学の学生に、今後どのような関わり方ができるか	協働での取り組み	市の消費生活相談員と一緒に新成人向けの消費啓発活動（例えば高校3年生）を行なう。 情報発信（紙面やインターネット）を学生と共にに行なうことができればと思います。 パンフレットづくりにも学生（若者たち）の意見を取り入れることも重要なかと思います
		大垣女子短期大学の強みをアピールし、地域（自治会・老人クラブ、子どもの居場所）などの活動に提案・参画することが求められているかと思う。
		小中高校生にとっては姉のように、高齢者にとっては孫のように、どの年代にも関わることのできる世代であることを生かした活動もよいのではないかと思います。
	大学の特性を生かした取り組み	行政職員が市民に訴えかけるより、当事者同士（若者から若者へ）の呼びかけの方が、ずっと相手に響きやすい、受け入れやすいものになると実感している。今後も、学内外において学生の皆さんに啓発活動に協力してもらえるとありがたい。
		小学生の防火・防犯ポスターや標語募集のように、コンテスト形式で文字、イラスト、音楽などの募集を大学生（岐阜協立大学、女子短大+地域の大学生）に掛けても良いと思います。
		学んだことを生かして、消費者教育にちなんだデザインや歌などができるといいかと思う。
		被害にあわないため、市の広報誌で4コマを掲載してはどうか。
	大学としての取り組み	行政からの要請で対応するのではなく、プロジェクト等を通して大学としても提案していくことも必要ではないかと思う。
		まず学校内で広めてほしい。
その他意見	これまでの活動への感謝や評価	引き続き、多くの学生に消費者意識の高揚につながる学びの機会があるとよい。 買輩革盟に参加している学生の方々が積極的に意見・アイデア等を出していただいていることを本当にありがとうございます。
		消費者教育に関心を持って活動して頂きありがとうございます。
		啓発グッズのクリアファイルは、若者向けでよいと思う。
		啓発グッズのキャラクターのアイデアが素晴らしいと思います。
	今後の活動へのアイディア	学生は2年間という短い時間のなか、このようなプロジェクトに参加していただき、とても良い経験であると思います。気軽に参加していただき、社会に出る前の貴重な経験となり、この経験が今後に生かせていただけたらと思います。
		大垣女子短大がメインとなり、地域の大学生にも門戸を広げての活動をしてはいかがでしょうか？ また、地域の高校とのコラボや高校生がプロジェクトサポートメンバーとして関わってもらいたいと思います。
		行政にない自由な発想（あそび心）をどんどん提案してもらい、イベント等の啓発活動だけでなく日常生活の中でも啓発できる取り組みも行ってはどうか。
	継続への工夫	活動などをメディア（新聞等）に情報提供し、活動を記事として取り上げてもらうことも消費者啓発活動につながると思う。
		行政との協働プロジェクトということを意識せず、学生達がやりたいこと考えていることをどんどん取組んで欲しい。（時には、行政担当者が困惑するような提案も期待している。）
		市担当者の年代では思いつかない発想・感覚などを今後もできる範囲で反映させながら活動ができればと考えている。

内容からは、3年間の活動で本来の目的である「若年消費者への啓発活動」は十分に達成できたことがわかる。プロジェクトで作成したクリアファイルやチラシの配付も高校生や大学生など多くの若年消費者の元に届けることができ、特に本学の学生たちには身近な学生が参加しているプロジェクトからの発信として伝わっている。

また、学生たちにとってもこのプロジェクトに参加したことでの多くの学びがあったことが質問調査の回答に示された。経済産業省は職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力を「社会人基礎力」とし、2006年に提唱している¹⁰⁾。その能力は「前に踏み出す力」、「考え方」、「チームで働く力」の3つと12の能力要素から構成されているが、本プロジェクトに参加してその時々のテーマについて考え、自分の意見を伝え、他者と議論しながら目標に向かって共に進んで行くプロセスの中にこれらの能力を伸ばす機会がたくさんあり、自然に身につけていったのであろう。

今後に向けた課題の一つとしては、短期大学の特徴である学生の入れ替わりの早さが挙げられる。特に主力となっているデザイン美術学科の学生は在学期間が2年間しかないため安定したメンバーでの継続した取組が困難となる。また、授業の時間割や課題に取り組む時間に余裕がないため活動に充てる時間を捻出することが難しく、学生への質問調査の「参加のデメリット」にも挙げられていた。

渋谷¹¹⁾によると大学と地域の関わり方には次の4つがある：①大学教員が自分の研究の対象として地域と関わるもの、②大学が制度的に地域社会と関わりを持つもの、③教員主導で、研究目的だけではなく、授業の一環として学生の教育を目的として地域社会と関わるもの、④学生の自発的な取り組み。本学で2011年に取り組んだ教育G Pは②にあたり、大学全体で授業にも関連させて取り組むこと

ができた。本プロジェクトの取り組みは③と④の両方の意味合いを持つものであり、そのために学内での立ち位置が定まらず活動を進める際の支障となっている。大学と地域連携の取り組みでは、学生サークルを母体とするもの¹²⁾やゼミへの依頼で実施されるもの¹³⁾が多い。

地域連携の問題点のひとつとして、近藤は「私立大学と地域との関係形成が個々の教員に任せられてきたこと」を挙げており、解決の方向として「教員と職員が協働して地域社会の課題に答えるための教育研究を推進すること」だとしている¹⁴⁾。学内有志とともに課外活動として取り組む現在の形態で無理なく続けるためには、企業・市役所関係者質問調査の回答にもあった「大学の特性を生かし大学全体で取り組む」ことができるよう、教育研究の一環として行うなどの工夫が必要である。

しかしながら、本プロジェクトは自然発生的に立ち上がったような位置づけであるため学内の通常業務には該当しない活動のように捉えられがちである。大学の地域連携を支えた職員へのインタビュー調査を実施した長光は、地域連携に携わる際に難しいのは「地域連携は従来の大学の基幹業務と認識されてきたものとは性質が異なる」ことであり、地域連携に携わる職員は「好きでやっている」と捉えられてしまうと述べている¹⁵⁾。このプロジェクトに大学全体で取り組んでいくためには、学内でのさらなる周知やメンバー確保が必要である。学生向け質問調査でメンバー募集や今後の工夫についても尋ねたところ「学内での知名度を上げる」「当事者意識を持つてもらえるよう具体的に出来ることを提示して働きかける」「教職員に周知し本学HPやインスタグラムでも発信する」など多くの意見が寄せられたため、これを参考にして進めていきたい。

5. 今後の展望

今回の質問調査のまとめについて、プロジェクトの運営メンバーである大垣市まちづくり推進課の林晶子さんから以下のようなコメントが寄せられた：

(質問調査の結果への感想) 携わった学生から「普段の生活の中で消費生活に関するキーワードをメディアなどから自然と聞き取れるようになってきた」「知識が増えることで身のまわりの友人や家族にも気を付けた方がいいこととか、今流行っている手口を発信できるようになった。」という回答がいただけたのは、プロジェクトの大きな成果と言えるのではないかと思いました。また、デザインの企画、イベント参加、ミーティングなどの様々な活動を通し、単に「消費者啓発」を行っただけではなく、自分自身の社会経験としてとても役立ったという肯定的な印象を持ってくれていることをとても嬉しく思いました。参加した学生の皆さんを取り組みを通じて地域とのつながりの大切さを知ってくれることや地元行政のやっていることに関心を持ってくれることこそが、市が産官学で取り組みを行う大きな目的の一つだと思います。この経験を生かして学生さん達自身がよりよい地域づくりの担い手になっていってくれることを大いに期待します。

(プロジェクトとしての今後の希望) この取り組みを継続的に実施していただけるとともに、学内で関わる学生の裾野が広がる方法があれば、今回アンケートで学生さん達からいただいた意見等を参考に先生方とも検討していきたいと思います。さらに学内にとどまらず市内の他大学や高校生を含めた啓発活動などを展開できたら面白いです。

本プロジェクトの取り組みが大垣市サイドにとっても産官学の目的の達成に繋がったとのコメントはとても嬉しく、今後のモチベー

ションになるため学生にも伝えたい。従来の産官学連携について南¹⁶⁾は「産官学連携は理工・生物系分野が行うものであり、人文社会系分野は蚊帳の外という場面を幾度となく見てきた」と述べた上で、これまでの政策において見過ごされてきた人文社会系分野の知の活用に着目しそれによって得られる価値に言及している。本学の学科構成も理工・生物系分野ではないため技術面や産業面での産官学連携は難しいが、人文社会系及び実務に直結した各学科の専門分野で地域に提供できる知は多くあるため、今後このプロジェクトでもこれらの知を反映させていきたい。

地方大学に求められる役割として山田は「地方大学は、①地域における高等教育を受ける権利を守り、②地域の人材の育成を行うとともに、③地域の知の拠点として地域ビジョンや地域産業の振興などあらゆる分野においてその学識を提供しており、その存在は地域にとって欠かせないものとなっている」と述べている¹⁷⁾。本プロジェクトを②のよりよい地域の担い手となる人材育成に繋げ、③として各学科の特性を地域に役立てられるよう、今後も継続して取り組んでいきたい。

謝辞

本プロジェクトの立ち上げから運営メンバーとして参加してくださっている大垣市まちづくり推進課主査林晶子様、株大垣ケーブルテレビ総務部広報課課長吉田広行様に深く感謝いたします。また、本質問調査に回答を寄せてくださった大垣市まちづくり推進課の皆様、本学学生・卒業生の皆さんにも貴重なご意見をいただき、ありがとうございました。

引用文献

- 1) 小林英嗣、地域・大学連携まちづくり研究会：地域と大学の共創まちづくり、学芸出版社、京都、2008.
- 2) 井尻昭夫・江藤茂博・大崎紘一・三好宏・

- 松本健太郎、大学と地域 一持続可能な暮らしに向けた大学の新たな姿一、ナカニシヤ出版、京都、2020.
- 3) 上杉孝實・香川正弘・河村能夫、大学はコミュニティの知の拠点となれるのか、ミネルヴァ書房、京都、2016.
- 4) 芝浦工業大学地域共創センター：大学とまちづくり・ものづくり 一産学官民連携による地域共創一、三樹書房、東京、2019、pp18.
- 5) 大垣女子短期大学：文部科学省「平成 20 年度～22 年度」質の高い大学教育推進プログラム（教育 GP）採択「地域の子育て施策を活用した教育方法の改善 一大垣市との連携による子育てサロンの運営を通じた体験学習一 取組報告書、2011.
- 6) 連花一己：学生と地域を育てる産学官連携活動 一地方文系大学の一事例一、IDE 現代の高等教育 No.651：36-40、2023.
- 7) 消費者教育ポータルサイト：大垣女子谷大学の産学官取り組み 一若者が主導する当事者目線での情報発信一
https://www.kportal.caa.go.jp/topics/20230327_01/ 2023.12.26
- 8) 消費者トラブルに関するアンケート調査 報告書：大垣女子短期大学総合教育センター、2021 年 6 月（未公刊）
- 9) 奥田雄一郎：コロナ禍における大学生の地域の中での学び、共愛学園前橋国際大学論集、22：111-123.
- 10) 経済産業省：社会人基礎力
<https://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/index.html> 2024.1.8
- 11) 渋谷努：大学と地域社会の連携 一持続可能な協働への道すじ一、石風社、福岡、2016、P3-4.
- 12) 栗原ひとみ・金子功一：大学生による地域連携の一事例 一中高生の居場所カフェの運営を通して一、植草学園大学研究紀要、15:33-43、2023.
- 13) 帆北智子、大学の地域連携活動に関する一考察 一学生選書企画をつうじて一、創価人間学論集、16:85-102、2023.
- 14) 近藤敏夫、地域再生のための協働と大学の役割、佛教大学総合研究所協働研究成果報告論文集、10：1-9、2023.
- 15) 長光大志、大学の地域連携を支えた職員へのインタビュー調査、佛教大学総合研究所協働研究成果報告論文集、10：129-137、2023.
- 16) 南了太：人文社会系産官学連携 社会に価値をもたらす知、明石書店、東京、2023、pp.6.
- 17) 山田啓二：高等教育は地域を救うか 一地域連携プラットフォームに見る大学と地域の新局面一、IDE 現代の高等教育 No.634：P5-9、2021.

2023年度大垣女子短期大学学生相談室の活動報告

Activity Report 2023 - Student Counseling Room

茂木 七香¹⁾
Nanaka MOGI

松下智子²⁾
Tomoko MATSUSHITA

1. はじめに

2020年4月から3年間続いたコロナ禍は2023年5月に新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）が感染症法上の2類から5類に移行したことに伴って私たちの暮らしは大きく変化した。大垣女子短期大学（以下、本学）でも学生のマスク着用が任意となり、感染者数の減少とともに授業時の座席間隔等の対策も緩和した。別室に分かれてオンラインで実施していた大人数授業も、全員が入れる大講義室で対面実施できるようになった。学生たちの日常の姿も、マスク無しでの会話を楽しんだり向かい合って話しながら昼食を食べたり、とコロナ前に戻った様子であった。

本学では2020年度の4～5月に講義の開講延期やオンライン実施を行ったものの、それ以降は一部実習形式の授業を除きほぼ通常通りの対面授業を実施してきた。学生にとって大きなイベントである10月のみずき祭（大学祭）は2020年度中止、2021年度オンライン実施、2022年度学内者のみで対面実施と移行し、2023年度には外部からの参加者を迎えて従来通りの対面で実施することができた。コロナ禍には見合させていた飲食企画も復活し、以前と同程度の来場者と共に大学本来の賑やかさが戻ってきた。

-
- 1) 大垣女子短期大学総合教育センター教員／学生相談室カウンセラー（臨床心理士・公認心理師）
 - 2) 大垣女子短期大学学生相談室 非常勤カウンセラー（臨床心理士・公認心理士）

コロナ禍中のように非常事態を過ごしているといった空気はさほど見受けられず、落ち着いた雰囲気の中で過ぎたこの1年間を学生相談室の活動と共に振り返る。

2. 2023年度の学生相談室の取り組み

（1）学生相談室のオリエンテーション

学生相談室のオリエンテーションは、コロナ禍開始の2020年度は中止、2021年度は学科ごとに別室に分かれて動画視聴、2022年度は学内大ホールで座席間隔を空けて実施、と感染拡大状況に応じて段階的に行い、2023年度は従来通りの大講義室で実施する形となった。学生相談室担当者（以下、筆者）はマスクを着用していたものの、間近に顔の見える距離でオリエンテーションを実施することで、学生相談室をより身近に感じる機会を作ることができた。資料を配付し学生相談室の室内の様子と主な相談内容、利用方法等をパワーポイントで説明し、相談申込QRコードを掲載したA7サイズのカードを例年通り配付した。

（2）UPI（University Personality Inventory）

Inventory、学生精神的健康調査）の実施

2023年度もUPI学生精神的健康調査（University Personality Inventory、以下UPI）を実施した。これは全国学生保健管理協会が1968年に開発した心理検査であり、多くの大学で学生の心身の状態を把握するために用いられている¹⁾（項目内容は付表1を参照）。本学では2008年度から4月のオリエンテー

ション時に全学生を対象として実施し、コロナ前には配付した検査用紙にその場で記入させ回収していた。コロナ禍の2020年度以降はGoogleフォームからの入力とし、2023年度も同様に学内ポータルを通じて調査実施の趣旨と質問用紙のリンク先を送信し、学生相談室オリエンテーションでの説明と共に入力を促した。2023年4月12日～5月15日を入力期間としたが、切後にも未回答者が多数あったため、筆者の担当授業で再度呼びかけたり学内ポータルで再度連絡をしたりした結果、294名の回答があった（回答率63.1%、2022年度は回答者309名、回答率61.2%）。全回答のうち研究目的の分析や発表へのデータ使用に同意した245名分を集計・分析の対象とした。なお、2022年度と2023年度のUPIその他の質問項目への回答の研究利用については本学研究委員会の審査を受け、承認されている（承認番号R3-13、R5-1）。

UPIでは、ライスケール4項目を除いた56項目の合計得点の他、身体症状（以下、身体）、抑うつ、対人不安（以下、不安）、強迫・関係念慮（以下、強迫）の4つの下位項目の得点傾向で結果が判断される（各下位項目の構成内容は付表1参照）。2023年度の項目得点と2022年度の項目得点についてStudentのt検定を実施したところ、図1のような結果となった。どの項目得点も2022年より2023年の方が低かったが統計的な有意差はなかった（合計：2022年度16.1点・2023年14.7点、身体：2022年度16.1点・2023年度14.7点、抑うつ：2022年度3.3点・2023年度3.2点、不安：2022年度3.4点・2023年度3.0点、強迫：2022年度2.7点・2023年度2.4点）。学生たちの精神的不調は前年と比べて増加傾向とはなっておらず、COVID-19の影響は落ち着きつつある様子が見られた。

UPI項目と共に今困っていることや相談したいことを記入する自由記述欄を設けたとこ

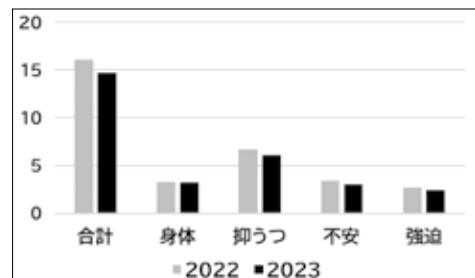


図1 UPI項目得点（2022年度と2023年度）

ろ6件の記述があり、2022年度の38件からは大きく減少した。このうち学生相談室での対応が必要だと判断された5名にメールで来談を促したところ4名が面接に訪れた。また、この時点では来談に至らなかった1名も後日学生相談室で面談を行うことが出来、援助の必要な学生の学生相談室利用に繋がった。

（3）COVID-19の心身への影響とストレス対処

行動、相談行動に関する調査の実施

1) COVID-19の身体と心の健康への影響

2020年初頭からのコロナ禍が長引き、学生の心身への影響が懸念された2021年度から、それまで実施していたUPIに加えてCOVID-19が心身の健康に与えた影響やストレス対処行動についての質問を追加し^{2,3)}、2023年度も継続して実施した。COVID-19が身体の健康に与えた悪い影響については「かなりあった」「少しあった」を合わせると32.4%の学生が感じており（図2）、2022年度の28.2%と比べてやや増加している。具体的な内容としては「運動不足」が一番に挙げられており（71名）、次いで睡眠の問題（36名）となっていた。3年間続いたコロナ禍生活の中で不要不急の外出はなるべく控えるといった行動様式が日常化し、慢性的な運動不足に陥ってしまっているために睡眠も上手く取れていないのではないかと思われ、全体的な生活リズムの崩れが心配される。

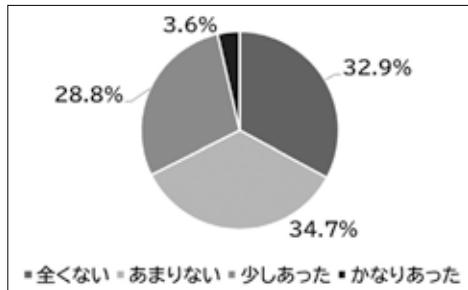


図2 COVID-19 の身体の健康への悪い影響

COVID-19 が心の健康に与えた悪い影響については「かなりあった」「少しあつた」を合わせると 38.6% の学生が感じており、こちらも 2022 年度の 37.6% と比べるとやや増加している。また、2022 年度と同様に、身体の健康よりも心の健康への悪い影響を感じた者の割合が多かった(図 3)。

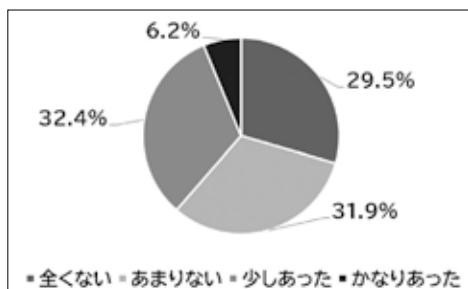


図3 COVID-19 の心の健康への悪い影響

具体的な内容には、集中力の低下(43名)、気分の落ち込み(42名)がほぼ同数で挙げられた。現在在学中の学生は高校時代から COVID-19 による様々な制約を受けてきた世代であるため、このような不調を長期間慢性的に自覚しているものと思われる。なお、2023 年度に COVID-19 は感染症法上の 5 類に移行したが、本調査は 2023 年度の始めに実施されたため、5 類移行後の実態はここにはまだ反映されていない。

2) ストレスへの対処行動についての質問

コロナ禍での慢性的なストレスに学生たちがどのように対処しているか、昨年度に引き続き質問項目で尋ねた。2021 年 3 月の学生対象アンケート(未発表)でのストレス対処

への自由記述回答を、日本語版 WCCL コーピングスケール²⁾の方略や項目内容を参考に分類し、以下の 6 つの下位項目の計 8 項目で構成した。

問題解決的対処 2 項目「自分たちでできるマスク着用や外出自粛などを行った」「自分たちの将来のために今が頑張り時だと考えた」

積極的認知対処 1 項目「自分のためだけでなく他の人のためにも頑張らなくてはと思った」ソーシャルサポート 1 項目「電話やラインなどで友達や家族とコミュニケーションを取った」

希望的観測 1 項目「コロナが収まったら楽しいことをしようとあれこれ考えた」

回避的対処 2 項目「コロナへの不安などいやなことはなるべく考えないようにした」「今はしょうがないとあきらめて我慢した」ストレス反応への対処 1 項目「好きなことをして気分をリフレッシュした」

質問項目への回答方法は、項目内容のような対処を「しなかった・あまりしなかった・少しした・した」の 4 件法とした。

各項目への回答の集計から、最も多く行われた対処法は問題解決的対処である、マスク着用や外出自粛であった(図 4)。COVID-19 の感染拡大防止への直接的行動であるこの対処を殆どの学生が行っていた一方、次に多く実施した対処法はストレス反応への対処である「好きなことをして気分をリフレッシュした」だった(図 5)。ストレス反応への対処は問題自体の根本的解決ではないものの、ストレス要因に害された精神的健康を回復させるためには非常に有効な手段であるため、多くの学生が積極的にこの対処法を用いていたことに安堵した。

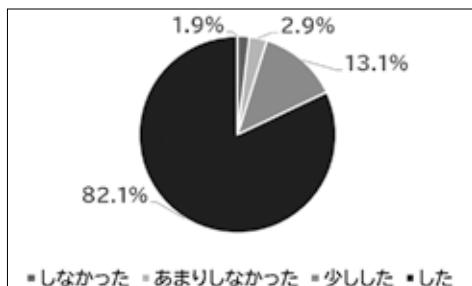


図4 「自分たちでできるマスク着用や外出自粛などを行った」

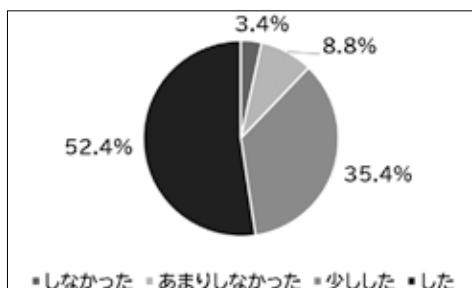


図5 「好きなことをして気分をリフレッシュした」

3) コロナ禍での相談行動について

ストレスへの対処行動の「ソーシャルサポート」に位置付けられる他者への相談については、相談の有無とその理由について詳しく尋ねた。その結果、「全くしていない」「あまりしていない」を合わせると 81.2% が相談をしなかったという現状が明らかになった(図6)。自由記述に書かれた理由では、「相談するほどでもないと思ったから」という内容が一番多かったが、「人に話す気力がなかった」「話しても変わることではないから」「他の人も同じことになっているから」「相談する機会がなかったから」という回答もあり、心身の不調を感じても相談行動を起こすことは繋がらないという COVID-19 の特殊な事情が窺われる。学生との会話の中でも、学生相談室の利用を促しても「自分だけじゃないから」「みんな大変なのだから」と気遣って相談を躊躇い、しんどさを訴える当事者に成り切れない姿があった。

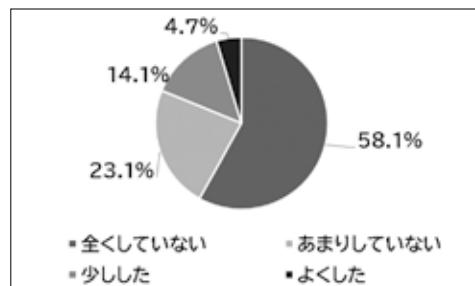


図6 心身の不調についての相談行動

(4) 学生へのメンタルヘルス教育

1) 授業の内容

UPI と COVID-19 の心身への影響、ストレス対処への回答結果をもとに、全 1 年次生を対象とした初年次教育授業(2023 年 7 月 19 日教養キャリア基礎演習Ⅰ「心身の健康について」)でメンタルヘルス教育を行った。この授業は 4 月に実施した健康診断と UPI 等の結果を解説し学生たちの今後の心身の健康に役立てるために行っている。心の健康については筆者が作成した配付資料とパワーポイントを用いて UPI 等の項目内容を説明し、回答の全体的な傾向を示すとともに、匿名でテキスト入力できるツール(Slido)を用いて意見交流を行った。今の心の状態を項目に照らし合わせて回答したり、日頃どのようなストレス対処をしているかをテキスト入力したりといった形で、多くの学生が自分自身の状況を発信した。回答は各自の携帯電話から行い、前方スクリーンに映し出された入力結果を筆者が解説したりコメントを加えたりした。ストレスモデルの説明や各ストレス対処方法の効果などについても説明した。UPI の結果を希望者に個別説明する旨もここで周知した(学生相談室だより紙面上にも掲載)。

2) 授業後の感想

授業後には心の健康やストレス、自らのストレス対処への気づきや振り返りの機会となつたことをうかがわせる感想が寄せられた:「ストレスを抱えたりして身体を壊すことがあると改めて気づき、疲れる前に休む」という

ことを心がけていきたいと思いました。」「なるべく自分にストレスがかからない生き方をしようと思った。」「しっかりと心とも向き合っていきたいな、と思いました。」「ストレスを感じた時は、自分の好きなことをやつたり、友達に話を聞いてもらったり、心を落ち着かせるために自分の好きな匂いを嗅いだりして、心を落ち着かせ、ストレスを溜めないようにしています。」

また、Slido で他者の意見に触れたり授業で筆者の解説を聞いたりしたことに対する感想もあった：「みんな何かしらのストレスや不安を持って生きていることを知って、同じなんだなと少しだけ安心出来ました。」「一言でも誰かに話すと心が軽くなるのを知ったので、しんどい時は無理せず一言だけでも話せる人に話そうと思う。」

COVID-19 の影響は、予想外に長引いて慢性化してしまったことと、「みんなも同じ状況である」という特殊な事態により自分自身の現時点でのストレスとして認識されにくいのではないかと思われる。この授業によって学生たちが改めて心身の状態を自覚し、様々なストレス対処方法とその効果を学ぶ機会を得られたことは、学生相談室の活動として意義のあるものであった。

(5) 学生相談室の通常業務

1) 学生相談室だよりの発行

2023年度は4号の学生相談室だよりを発行し、学生相談室前とカフェテリア、各学科掲示板の学内6か所に掲示した。記事にはCOVID-19に関する内容の記載はしなかった。

2) 個別の学生相談件数

2023年12月末時点での相談件数は新規24名、前年度からの継続4名、相談延べ件数は79件である。相談内容は、学業や進路、対人関係など例年通りであり、COVID-19との直接的な関連のあるものはなかった。

(6) 学生相談室主催イベントの実施と振り返り

本学学生相談室では、昨今問題となつて

る「心理的問題を抱えているが自ら相談に来ない学生」^{5, 6)}への支援に繋げるため、2021年度から学生相談室主催のイベントを実施している。イベントは非常勤カウンセラーの勤務日に合わせて開催され、当日の実施や計画、内容の検討、周知用のチラシ作成も非常勤カウンセラーが行っている。常勤カウンセラーである筆者は専任教員として授業も担当しているため学生との関係性が一定ではないことを考慮して、どの学生とも同等の距離で関わる非常勤カウンセラーにイベントを任せている。

潜在的な相談ニーズのある学生や援助要請できない学生と学生相談機関がいかに繋がれるのかは重要なテーマであり、一部の大学ではコロナ禍で急速に広まったICT活用とともにSNSを使った情報発信で学生と繋がる取り組みもなされている⁷⁾。相談を求めて訪れる学生を待つだけではなく、学生相談室側からの発信で学生を受け入れて学生相談室利用に繋げるために、予約不要で誰でも参加できるイベントの存在は大きい³⁾。また、学生相談室を利用する学生の中には固定化した人間関係に関する悩みを持つ者もあり、日頃の人間関係から離れて新たな人と関わる「場」を作ることの必要性も感じられた。そこで、コロナ禍の中でリアルの人間関係の経験が少ない学生たちが対人関係を広げ、居場所と感じられる場を提供することを目的として2023年度のイベントを計画、実施した。

1) 2023年度のイベントの概要

2023年度には年間を通じて4回のイベントを実施した(表1)。場所はすべて学生相談室の出口に近いオープンスペースで、イベント実施中は扉を開放して出入り自由とした。

表1 2023年度の取り組み

月日	内容	参加人数
5/16	アロマストーンを作ろう	3人
6/15		3人
11/16	サツマイモのバター焼きを作ろう	35人
12/16	カップケーキを作ろう	27人

2022年度の調査³⁾でイベントに参加できない理由を学生に尋ねたところ「日程が合わない」という意見があったため、2023年度前期は同じ内容のイベントを日程を変えて2回行った。後期も同様に同じ内容で2回行う予定であったが、材料と場所の都合上「食べ物を囲む」というテーマはそのままで内容を変更した。実施時間は非常勤カウンセラーの勤務日時に合わせて木曜日の15:20~17:00とし、この時間帯ならば予約不要でいつでも来室可とした。

前期のイベントは手作業を通じて緊張感の緩和を図るとともに参加した学生が相互に会話しやすい場を提供することを目的とした。参加人数は少なかったが、異なる学科の学生同士が作業に取り組みながらコミュニケーションを取っていた。参加した学生からは「アロマオイルに興味があった」「作るのは楽しいけど持って帰るものは要らない」「自分は作りたくないが他の人の作業を見たい」などというコメントが寄せられ、今後のイベントの内容を考える上で参考になった。

後期にはCOVID-19による飲食の制限が緩和されたことを受け、簡単な調理を取り入れて参加人数の増加を狙ったところ参加人数が増加した。しかし、前からの友人同志や多人数のグループでの参加が多く、参加したグループ単位ごとに入れ替えて調理や飲食を行った為、普段の対人関係が広がる様子はあまり見られなかった。参加した学生の様子か

ら、飲食内容の場合はコミュニケーションよりも飲食に集中する傾向があることが分かった。また、参加者が増えた時に担当者を手伝つたり担当者に代わって場を取り仕切ったりする学生も居り、学生の新たな姿を知る機会になった。「一人暮らしなので友達と作りながら食べられるのが楽しい」「みんなで調理する経験があまり無いので楽しい」「(作ったカップケーキを)SNSに上げたいから来た。」といった感想から、学生たちの日常生活や興味関心も垣間見えた。

イベント情報の入手経路は学内ポータルからが大半であり、「友人に誘われたから」「相談室から楽しそうな声が聞こえてきたから」というものもあった。11月のイベントではサツマイモを焼くバターの匂いが学内にも広がったため、「匂いにつられて参加した」という者もあった。

2) 振り返りと今後の課題

2022年度の参加者の様子を踏まえ、前期には「五感を刺激し非日常感のある物を作る」アロマストーン作りを設定したが、参加者の感想からは「その場で消費できる物」の方が負担が少ないようと思われた。また、参加した学生の様子から、手先の器用さに自信の無い学生にとっては個々で作品を作るようなテーマには参加しにくいのではないかとも考えられた。

後期の飲食内容は「1つの物を皆で囲む」という過程がある方が担当者・学生双方のコミュニケーションが取りやすく、コロナ禍の飲食制限によってそのような機会が少なかった学生にとって心温まるひと時を提供できるのではないかと考えて取り入れた。徳永ら⁸⁾によると「共食は自分の食事を見ることで会話中に相手を見続ける心理的負担を軽減させ話しやすく」なることであり、稻垣らも「食事由来の満足感は体調と会話に関連し、日常生活に充実感をもたらす」と述べている⁹⁾。相談室からの匂いや楽しそうな雰囲気

に誘われて参加した学生も居たため、12月のカップケーキのように個々で盛りつけを行う形より「他者と1つのものを囲み」皆で調理する方が共食の効果も高くなると思われる。また今回、飲食イベントの事前準備を保健室スタッフに依頼したり、当日の参加者が多数になった時に管理が行き届かなかつたりするなど人手不足が問題となつたため、今後は保健室と連携して計画を進めるよう運営方法についても工夫しながら飲食内容を継続したい。

高石¹⁰⁾によると、現在本学に在籍している学生たちは「コロナ禍で入学し、それ以前にはあったキャンパスでの社会の疑似体験（多様な人間関係の構築や、困難に出会ったときの対処方法の学習など）がほとんどできていない」世代であり、学生たちにリアルな体験・交流の場を提供し心理的成熟を促進させることの必要性は高い。学生相談室のイベントがその一助となるよう、その場を楽しむことに加えて他者と交流する中で自己理解や他者理解を促せるようなワークも今後は取り入れていきたい。

3. コロナ禍を越えた今後に向けて

2023年度を振り返ってみると、3年間続いたコロナ禍は収束を迎え私たちの生活の中にCOVID-19の影響はさほどなくなったようにも思える。しかしこれを、元通りの生活に戻った、問題は解決したと捉えるのは短絡的である。少し長いが高石¹⁰⁾の言葉を引用する：「個人も社会も、回復して新たな在り方に移行するということは、慣れ親しんだ過去の在り方を手放し、喪失することを同時に含んでいます。マスクを外すという変化への反応に象徴されるように、つらく不本意でも3年間のうちに慣れ親しんだ「コロナ禍の自分」を失う不安や寂しさを覚えるのは自然なことです」。学内には未だマスクを着用したままで過ごしている学生も見受けられ、コロナ禍で行ったUPI等の調査^{2, 3)}では「人と関わら

なくてもいいので楽だ」「一人で過ごす時間が増えて充実している」という意見もあった。コロナ禍に適応しそれなりの居心地の良さを見つけて過ごしてきた学生たちは、そこからまた新たな（元の）生活への適応を強いられているのである。

織田¹¹⁾は「活動制限の撤廃によって人とリアルに出会う機会が増えていく中で「つながり」の構築が今後の学生支援にとってのキーワードとなり、学生が自粛生活によって希薄になっていた他者との関係を再構築する作業を支える為にはより強固なネットワークが必要である。」と述べている。学生相談室の活動に留まらず、学内の正課内外の様々な所で学生同士が自然に繋がれるような場面を意識して作っていきたいと思う。

また、コロナ禍では皆が同じように苦しい状況であったためますます援助要請をしなくなってしまった学生の不調を把握する際に参考となるのが「遠まわしな援助要請」という表現方法である。これは岡崎¹²⁾によるもので、「元気のない素振りをする」「いつもよりテンションの低い声を出す」など、不調により無意識に表現されるものとは異なり、意図的に間接的または非言語的な援助要請を行うといった方法である。大学生を対象とした調査で、援助して欲しい時に直接的な援助要請ではなくこのような「遠まわしな援助要請」を行う場合があることが明らかになっている。この項目内容を意識しておくと、同様な様子の見られる学生に声をかけて学生相談室の利用に繋げることが可能となるため、見落とさずにこちらから気づけるようにしたい。

コロナ禍が収束したように思える今こそ我々が長期にわたって晒してきたCOVID-19の影響を改めて意識し、学生たちが他者との適度な関わりを体験しながら年齢相応に発達していくような取り組みを今後も考えて行く。

引用文献

- 1) 平山 瞬、全国大学メンタルヘルス研究会：大学生のメンタルヘルス管理 UPI 利用の手引き、創造出版、東京、2011、pp.10-11.
- 2) 茂木七香：2021年度大垣女子短期大学学生相談室の活動報告、大垣女子短期大学紀要、63：111-117、2022.
- 3) 茂木七香、松下智子：2022年度大垣女子短期大学学生相談室の活動報告～メンタルヘルス教育の導入と学生相談室イベントの開催～、大垣女子短期大学紀要、64：55-64、2023.
- 4) 中野敬子：ストレス・マネジメント入門、金剛出版、東京、2005、43－50.
- 5) 木村真人：悩みを抱えていながら相談に来ない学生の理解と支援—援助要請研究の視座から—、教育心理学年報、56：186－201、2017.
- 6) 岡伊織、鉢谷路、山崖俊子：University Personality Inventory (UPI) 高得点者が抱える潜在的ニーズ、学生相談研究、31(2)：146-156、2010.
- 7) 日本学生相談学会特別委員会：座談会 SNS を使った学生相談機関からの情報発信、学生相談ニュース、No.133：3-8、2023.
- 8) 徳永弘子、武川直樹、木村敦：孤食と共に食における食事動作のメカニズム - 食事の形態がもたらす心理的影響との関連に照らして - 日本食生活学会誌、27 (3) 167-174、2016.
- 9) 稲垣佳映、岡本美紀、武藤慶子：女子学生の青少年期の共食状況及び現在の食環境についての検討 長崎県立大学看護栄養学部紀要、17 13-21、2019.
- 10) 高石恭子：理事長メッセージ 巣ごもりから飛び立つとき、学生相談ニュース、No.133：1-2、2023.
- 11) 織田万美子：2022年度における学生相談界の動向 学生相談研究、44 (1) 53-63、2023
- 12) 岡崎友里加：遠まわしな援助要請尺度の作成、心理臨床学研究、41(2)、139-144、2023

<付表1 UPI 学生精神的健康調査の項目>

1 食欲がない	16 不眠がちである	31 赤面して困る	46 体がだるい
2 吐き気、胸やけ、腹痛がある	17 頭痛がする	32 どもったり、声がふるえる	47 気にすると冷や汗がでやすい
3 わけもなく便祕や下痢をしやすい	18 首すじや肩がこる	33 体がまてつたり、冷えたりする	48 めまいや立ちくらみがする
4 動悸や脈が気になる	19 胸が痛んだり、しめつけられる	34 排尿や性器のことが気になる	49 気を失つたり、ひきつけたりする
5 いつも体の調子がよい	20 いつも活動的である	35 気分が明るい	50 よく他人に好かれる
6 不平や不満が多い	21 気が小さすぎる	36 なんとなく不安である	51 こだわりすぎる
7 親が期待しすぎる	22 気疲れする	37 独りでいると落ち着かない	52 ぐり返し、確かめないと苦しい
8 自分の過去や家庭は不幸である	23 いろいろしやすい	38 ものごとに自信がもてない	53 汚れが気になって困る
9 将来のことを心配しすぎる	24 怒りっぽい	39 何事もためらいがちである	54 つまらぬ考えがとれない
10 人に会いたくない	25 死にたがなる	40 他人に悪くられやすい	55 自分のへんな匂いが気になる
11 自分が自分でない感じがする	26 何事も生き生きと感じられない	41 他人が信じられない	56 他人に陰口をいわれる
12 やる気が出でこない	27 記憶力が低下している	42 気をまわすすぎる	57 周囲の人が気になって困る
13 悲観的になる	28 根気が続かない	43 つきあいが嫌いである	58 他人の視線が気になる
14 考えがまとまらない	29 決断力がない	44 ひけ目を感じる	59 他人に相手にされない
15 気分に波がありすぎる	30 人に頼りすぎる	45とりこし苦労をする	60 気持ちが傷つけられやすい

< ライスクール 5, 20, 35, 50 > < 身体的症状項目 1-4, 16-19, 31-34, 46-49 > < 抑うつ項目 6-15, 21-30 >

< 対人不安項目 36-45 > < 強迫・関係念慮項目 51-60 >

彙 報

学外における主な研究・教育並びに社会活動 (令和5年4月～令和6年3月)

A. 論文・著書、学会等研究活動、作品展・演奏活動

論文・著書

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
光井 恵子	横井 香織 越山沙千子 吉永早苗他	ピアノグループえすぶり第38回デュオコンサート 学生が安心して取り組むことのできる領域「表現」の授業提案に向けて～保育者養成校における表現活動の実践事例から～	演奏 研究ノート	サラマンカホール 乳幼児教育・保育者養成研究第4号	5.10.1 6.3.31
垣添 忠厚	松村 齋 中村 親也	デジタル遊具を活用した重症心身障害児の自立的支援に関する一考察	原著論文	発達精神医学研究所紀要第9号	6.3.12
名和 孝浩	立崎 博則 宮本 純子	保育実務研修の質保証に向けた一考察 —科目の現状と今後の課題—	論文	発表論文	6.3
立崎 博則	名和 孝浩 宮本 純子	表現の失敗から新しい表現を探る造形ワークショップの実践と考察 保育実務研修の質保証に向けた一考察 —科目の現状と今後の課題—	論文	発表論文	6.3
宮本 純子	立崎 博則 名和 孝浩	保育実務研修の質保証に向けた一考察 —科目の現状と今後の課題—	論文	発表論文	6.3
田中 久志	なし	世界農業遺産「清流長良川の鮎」副読本（教育用まんが）	著書 A5版36ページ	岐阜市、関市、美濃市、郡上市の学校他、清流長良川あゆパーク等で配布	5.4.～
日原 広一	ハイフネーション	HyphenationProject(緊 PJ)	商品プロモーション	ウェブサイト	5.10.28
黒田 皇		第97回国展（東京・名古屋） 第61回国展 ACT展	展覧会出品 展覧会出品 展覧会企画出品	国立新美術館 他 愛知県美術館ギャラリー 岐阜県美術館県民ギャラリー	5.5.3～5.5.15 5.10.24～5.10.29 6.1.30～6.2.4

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
黒田 皇		羽島市美術協会展	展覧会出品	不二羽島文化センター	6.2.8～ 6.2.11
服部 篤典		大垣女子短期大学 ウインドアンサンブル OG 演奏会	指揮	スイトピアセンター文 化ホール	5.5.14
		大森石油株音楽部 オーモリウインドアンサンブル定期演奏会	指揮	一宮市民会館	5.7.9
		ぎふ羽島吹奏楽団定期演奏会	指揮	不二羽島文化センター	5.7.23
		愛知淑徳高校吹奏楽部 OG 演奏会	指揮	長久手市文化の家 森のホール	5.8.27
		オーモリウインドアンサンブル 全国産業安全衛生大会コンサート	指揮	ポートメッセ名古屋	5.9.27
		オーモリウインドアンサンブル小学校 コンサート	指揮	稻沢市立牧川小学校	5.11.7
		オーモリウインドアンサンブル 中部日本都市対抗軟式野球大会 開会式典演奏	指揮	刈谷市刈谷野球場	5.11.10
		オーモリウインドアンサンブル 名古屋春節祭オープニングコンサート	指揮	名古屋市 久屋大通公園	6.1.5
		オーモリウインドアンサンブル 犬山春節祭オープニングコンサート	指揮	犬山市昭和横丁	6.2.16
		ぎふ羽島吹奏楽団ランチタイムコンサート	指揮	不二羽島文化センター ロビー	6.3.2
		愛知淑徳中学・高校吹奏楽部 定期演奏会	指揮	Niterra 日本特殊 陶業市民会館 名古屋市民会館	6.3.22
鈴木 孝育		第 30 回中学生の集い 冬・ぽかぽか コンサート	指揮	大垣フォーラムホテル	5.12.3
		第 27 回大垣女子短期大学音楽総合学 科ウインドアンサンブル定期演奏会	指揮	大垣市スイトピアセン ター 文化ホール	6.2.12
横井 香織	光井 恵子	ピアノグループ えすぶり 第 38 回 デュオ・コンサート	演奏	サラマンカホール	5.10.1
加藤 智樹	松川 千夏	歯科衛生士養成短期大学に関する調査	原著	大垣女子短期大学紀要 第 64 号	5.5.31

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
大林 泰二	Hiromi Nishi, Tsutomu Ueda, Kouji Ohta, et al. Takashi Kono3, Yukio Yoshioka5, Masaru Konishi6, Ryotaro Taga7, Yuya Toigawa7, Takako Naruse8, Eri Ishida9, Eri Tsuboi9, Kanae Oda9, Kana Dainobu10, Tomoko Tokikazui10, Kotaro Tanimoto9, Naoya Kakimoto11, Hiroki Ohge12, Hidemi Kurihara13 and Hiroyuki Kawaguchi1	Head and neck cancer patients show poor oral health as compared to those with other types of cancer	原著論文	BMC Oral Health	5.9.6
松下 健二	Yokoi H, Furukawa M, Wang J, Aoki Y, Raju R, Ikuyo Y, Yamada M, Shikama Y, Saji N, Ishihara Y, Murotani K, Uchiyama A, Takeda A, Sakurai T	Erythritol can inhibit the expression of senescence molecules in mouse gingival tissues and human gingival fibroblasts.	原著論文(英文)	Nutrients	5.9.19
		Cross-sectional analysis of periodontal disease and cognitive impairment conducted in a memory clinic: the Pearl study.	原著論文(英文)	J Alzheimers Dis	5.10.24
	Yokoi H, Wang J, Ikuyo Y, Yamada M, Shikama Y, Furukawa M	Long-term sorbitol consumption affects the hippocampus and alters cognitive function in aged mice	原著論文(英文)	Genes to Cells	6.3.11
	Furukawa M, Yokoi H, Wang J, Ikuyo Y, Tada H, Yamada M, Shikama Y	Premature gray hair development in the interbrow region owing to the loss of maxillary first molars in young mice.	原著論文(英文)	Genes to Cells	6.2.20

氏名	共同研究者	題目	形式	発表の場	発表年月日
松下 健二		生活いきいき事典『デンタルケアを見直そう』	コラム	月刊清流	6.1.5
吉田 康夫	高谷嵐之介 赤羽根健生 池田 和由 加藤 悅子	歯周病原細菌 <i>Porphyromonas gingivalis</i> 由来酢酸キナーゼと阻害化合物との構造評価	ポスター発表	第 23 回日本蛋白質科学年会	5.7.5
松川 千夏	加藤 智樹	歯科衛生士養成短期大学に関する調査	原著	大垣女子短期大学紀要 第 64 号	5.5
大谷 悅世	松久保 隆 佐藤 涼一 竹之内 茜	歯科医師・歯科衛生士 国試対策ブック 衛生・公衆衛生・口腔衛生・社会福祉・関係法規 パッと見ておぼえら れるまとめテーブル 2024	著書	一世出版株式会社	5.6
茂木 七香	松下 智子	匿名発言ツール「Slido」の効果的な 活用方法について 2022 年度大垣女子短期大学学生相談 室の活動報告	論文	大垣女子短期大学紀要 第 64 号	5.5.31
				大垣女子短期大学紀要 第 64 号	5.5.31

B. 社会的・啓発的活動

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
光井 恵子	大垣女子短期大学・大垣市	子育てママ大学	講師	大垣女子短期大学	5.5.11
	大垣市こども未来部子育て支援課	大垣市こどもの居場所づくり懇談会	委員	大垣市役所	5.6. 2 5.7.21 5.10.31 5.12.12 6.3.13
	岐阜県教育委員会	岐阜県カリキュラム開発会議	委員	岐阜県総合教育センター	5.6.5 6.2.14
	大垣市保育研究推進委員会	企画研修会	講師	大垣市南部子育て支援センター	5.7.10
	大垣市こども未来部子育て支援課	大垣市子育て支援会議	会長	大垣市役所	5.8.9 5.10.11 6.2.27
	岐阜県	子育て支援員研修	講師	長良川スポーツプラザ他	5.10.16 5.10.17 5.10.21 5.10.29
	大垣市子育て総合支援センター	大垣市子育て講座	講師	大垣市南部子育て支援センター	5.11.16
	安八町立結こども園	すこやか講座	講師	安八町立結こども園	6.1.17
	大垣市教育委員会	大垣市留守家庭児童教室運営委員会	会長	大垣市役所	6.1.31
	一宮市立図書館	読み聞かせボランティアスキルアップ講座	講師	一宮市立中央7図書館	6.2.15 6.2.16
川島 民子	大垣市子育て総合支援センター	子育てまちなかキャンパス	講師	キッズピアおおがき子育て支援センター	6.3.19
	安八町学校教育課	安八町教育支援チーム会議	委員	安八町ハートピア	5. 4.18 6. 2. 7
	八幡ハチドリの会	講演会	講師	近江八幡市総合福祉センター	5. 9. 5
	草津市子ども未来課	特別支援教育研修	講師	草津市立市民総合交流センター	5. 9.13
	滋賀大学	教職実践演習（教育学部専門科目）	講師	滋賀大学	5.11. 9
滋賀県特別支援教育研究会通級指導教室部会	滋賀県特別支援教育研究会通級指導教室部会	第1 ブロック研修会	講師	大津市教育センター	5.11.10

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
川島 民子	守山市教育研究所	第4回守山市初任者研修	講師	守山市生涯学習・教育支援センター	5.11.24
	米原市教育センター	5歳児部会研修会	講師	米原市立山東幼稚園	6.1.30
	堅田人権教育研究会特別支援教育部会	第2回全体研修会	講師	大津市立堅田中学校	6.1.31
	滋賀県特別支援学校PTA連絡協議会	人権研修会	講師	草津市立市民総合交流センターキラリエ	6.2.1
	滋賀県高等学校等進路指導研究会特別支援部会	第25回福祉的就労研究会	講師	滋賀県立長浜養護学校	6.2.1
	滋賀県立長浜養護学校	キャリア教育推進に関して	講師	滋賀県立長浜養護学校	6.2.1
大橋 淳子	社会福祉法人 大垣慈光福祉会	認定こども園大垣ひかり保育園、浅草 ひかりにこにこ園 理事会、監事会	理事、監事	大垣ひかり保育園	5.6.24～
	大垣市市民活動推進課	大垣市まちづくり市民活動育成支援推進委員会	委員	大垣市	5.7.1～
	岐阜県	子育て支援員研修	講義	オンデマンド講座	5.9.14～ 5.10.12
	大垣市子育て総合支援センター	子育てまちなかキャンパス「生活習慣について考えてみよう」	講義・演習	キッズピアおおがき	5.10.17
	ネットワーク 大学コンソーシアム岐阜	公開講座 子供の発達・成長を学ぶ「子どもの育ちと環境について」	講義	岐阜商工会議所	5.11.28
	大垣市子育て支援課	大垣市墨俣児童館運営委員会	委員長	大垣市	6.2.1～
垣添 忠厚	垂井町	垂井町子ども・子育て会議	会長	垂井町	5.4.1～
	岐阜県キンボールスポーツ連盟	岐阜県キンボールスポーツ連盟役員会	副会長		5.4.1～
	大垣市教育委員会	大垣市教育支援委員会	委員	大垣市	5.4.26～
	大垣市教育委員会	大垣市留守家庭児童教室運営委員会	委員	大垣市	5.5.1～
	大垣市レクリエーション協会	大垣市「クラブいちやられ」指導者研修会	講師	大垣市青年の家	5.5.6

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
垣添 忠厚	岐阜県レクリエーション協会	岐阜県レクリエーション協会理事会	理事	岐阜県リクリエーション協会	5.5.13～
	大垣市レクリエーション協会	大垣市「クラブいちちゃれ」第1回活動	講師	大垣市青年の家	5.5.20
	大垣市保育者等研究推進委員会	大垣市保育者等研修会「企画研修会：幼児と運動発達と遊び」	講師	勤労総合福祉センター	5.6.20
	ネットワーク大学コンソーシアム岐阜	共同プログラム「特別な支援を必要とする児童・生徒・学生への対応VI」	講師	岐阜大学サテライトキャンパス	5.6.25
	大垣市教育委員会	大垣市教育支援委員会小委員会	委員	スイトピアセンター等	5.9.13
					5.9.20
					5.9.28
	岐阜県	子育て支援員研修 基本研修「子どもの障害」	講師	オンデマンド講座	5.8.16～ 9.13
	岐阜県	子育て支援員研修 地域保育コース「特別に配慮を要する子どもの対応」	講師	オンデマンド講座	5.9.14～ 10.12
公益財団法人すくすく岐阜	創立 20 周年記念企業「障がい者スポーツの魅力」第二部パネルディスカッション	パネラー	岐阜グランドホテル		5.11.26
	岐阜県レクリエーション協会	レクリエーション・インストラクター養成講習会	講師	羽島市福祉ふれあい会館	5.12.3
	岐阜県	令和 5 年度地域療育システム推進会議 (西濃圏域障がい者総合支援推進会議 療育・医療的ケア部会)	検討委員	西濃総合庁舎	6.1.18
名和 孝浩	岐阜県	岐阜県子育て支援員研修	講師	長良川国際会議場、他	5.10.16 5.10.17 5.10.21 5.10.29
	大垣市教育委員会	大垣市保幼小連携協議会	委員	大垣市役所	6.2.1
	養老町公私立保育園・こども園園長会	養老町乳幼児教育・保育研究会	講師	養老町立養北こども園	5.5.20
立崎 博則	三城幼保園	園内研修会「絵画・造形について」	講義・演習	三城幼保園	5.7.21
	大垣市子育て支援課	水都つ子ウィーク！ 親子で一緒に スタンプやシール、クレヨンであそぼう	講義・演習	大垣市役所 8 階大会議室	5.8.18
	大垣市研究推進委員会	企画研修「手作りおもちゃ」	講義・演習	南部子育て支援センター	5.8.30

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
立崎 博則	守屋多々志美術館	守屋多々志美術館子どもワークショップ	講義・演習	守屋多々志美術館	6.2.24
田中 久志	岐阜広告協会 岐阜県読書推進運動協議会、 中日新聞社、 岐阜県図書館	第 51 回岐阜広告協会賞 岐阜県おすすめの 1 冊コンクール 審査他	審査委員長 イラスト POP 部門審査委員長	岐阜新聞社 岐阜県図書館	5.5.19 5.12.8 ~ 6.1.27
日原 広一	大垣市 岐阜県庁	水都大垣再生プロジェクト 第 42 回全国都市緑化ぎふフェアの概要	指導 指導	新聞紙面 ウェブサイト	5.8.30 6.1.31
黒田 皇	岐阜県博物館 大垣市・大垣市教育委員会 大垣市商店街振興組合連合会 MIF 2023 実行委員会	令和 5 年度 第 2 回マイミュージアムギャラリー展示 あそび 一楽しいひとときをデザインする— 令和 5 年度 大垣市美術展 (一般の部) まちなかスクエアガーデン オリジナルオーナメントワークショップ ムービング・イメージ・フェスティバル (MIF) 2023	企画参加 審査 企画参加 上映会	岐阜県博物館 マイミュージアムギャラリー 大垣市スイトビアセンター文化会館 大垣市・丸の内公園 愛知芸術文化センター	[展示] 5.5.27 ~ 5.7.2 [ワークショップ] 5.7.2 [審査] 5.9.29 5.12.3 5.12.3
伊豫 治好	大垣女子短期大学・岐阜県図書館	ASIAGRAPH 2023 in GIFU CG Art Gallery	指導、助言	岐阜県図書館	5.12.21 ~ 24
長久保光弘	大垣女子短期大学・岐阜県図書館	「ASIAGRAPH 2023 in Gifu CG Art Gallery」展示施行	会場設営会場運営	岐阜県図書館企画展示室 II	5.12.21 ~ 12.24
鈴木 孝育	大垣市 大垣市 大垣市 岐阜県 愛知県吹奏楽連盟 岐阜県吹奏楽連盟	大垣市行政不服審査会 大垣市情報公開審査会 大垣市個人情報保護審査会 岐阜県後期高齢者医療広域連合情報公開・個人情報保護審査会 西三河南コンテスト・クリニック 岐阜県高等学校吹奏楽発表会	委員 委員 委員 委員 講師 講師	大垣市 大垣市 大垣市 岐阜県 西尾市文化会館 不二羽島文化センター	3.4.1 ~ 6.3.31 3.4.1 ~ 6.3.31 3.4.1 ~ 6.3.31 3.4.1 ~ 6.3.31 5.5.3 5.11.11,12

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
鈴木 孝育	「管楽器ソロコンテスト in 東海」実行委員会	第 10 回管楽器ソロコンテスト in 東海	審査員	名古屋芸術大学	6.3.27,28
菅田 文子	日本音楽療法学会	第 23 回日本音楽療法学会学術大会	学術大会	長良川国際会議場・大	5.9.1 ~ 3 会長
横井 香織	大垣市	大垣市環境 SDGs おおがき未来創造事業実行委員会	委員・監事	オンライン会議	5.5.18
	大垣市教育委員会	大垣市日本昭和音楽村運営協議会	委員	大垣市日本昭和音楽村	5.5.25
	公益財団法人 大垣国際交流協会	公益財団法人 大垣国際交流協会 令和 5 年度 定時評議員会	評議員	大垣市スイトピアセンター スイトピアホール	5.6.14
	大垣市	大垣市環境審議会	委員	大垣市	5.7.1 ~
	大垣市	大垣市市民環境賞選考委員会	委員	大垣市役所	6.2.5
	大垣市子育て総合支援センター	子育てまちなかキャンパス「リトミックであそぼう」	講師	キッズピアおおがき子 育て支援センター	5.11.21
	カワイ音楽コンクール委員会	第 57 回カワイ音楽コンクール カワイこどもピアノコンクール 岐阜地区オーディション	審査員	不二羽島文化センター	5.12.24 / 5.12.27 / 6.1.21
加藤 智樹	大垣市経済部 商工観光課	大垣市雇用戦略指針策定委員会	委員(有識者)	大垣市役所	5.10.12
	大垣市経済部 商工観光課	大垣市観光戦略指針策定委員会	委員(有識者)	大垣市役所	5.10.20
大林 泰二	全国歯科衛生士教育協議会	理事会、総会および教育・研究委員会	学術集会、 会議	愛知学院大学	5.5.13
	東海地区歯科衛生士教育協議会	総会および研修会	学術集会ウイ ンクあいち		5.7.1
松下 健二	日本抗加齢歯科医学研究会	咀嚼機能と脳機能～口腔から始める抗加齢の新展開～	教育講演	東京	6.1.21
	日本抗加齢医学会	専門医・指導士認定委員会講習会 咀嚼機能と脳機能のアンチエイジング	教育講演	大阪	6.3.24
	日本抗加齢医学会	WEB メディアセミナー歯科領域における高齢者医療の現状と課題について .	教育講演	Web	6.3.21
	日本口腔ケア学会	歯周病菌のコントロールによる認知症予防の可能性	教育講演	名古屋	6.3.10
	日本神経科学会	口腔の健康と認知症の関連性	シンポジウム	神戸	5.7.6

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
吉田 康夫	日本細菌学会 会員 日本細菌学会中 部支部会会員 愛知学院大学 歯学会 歯科基礎医学 会会員 日本バイオ フィルム学会		評議員 評議員 評議員 代議員 評議員		
水嶋 広美	岐阜県歯科医 師会 大垣女子短期 大学 岐阜県歯科医 師会 大垣女子短期 大学 大垣歯科医師 会・大垣女子 短期大学 日本口腔ケア 学会 大垣市 かわまちテラ スイベント 令和5年度私 立大学地方創 生推進事業	岐阜県歯科医師会との第1回臨床実習 説明会 岐阜県歯科医師会との第2回臨床実習 説明会 大垣歯科医師会への臨床実習説明会 日本口腔ケア学会 歯科衛生士（国家資格）というお仕事 を知っていますか？「お口のはたらき」 を考えたことがあります？イベント 歯科衛生士（国家資格）というお仕事 を知っていますか？「お口のはたらき」 を考えたことがあります？イベント	会議 会議 会議 評議員 小集団指導 小集団指導	岐阜県歯科医師会館 岐阜県歯科医師会館 大垣歯科医師会 日本口腔ケア学会 大垣市役所 モレラ岐阜	5.7.20 5.7.27 5.8.10 2.4.～ 5.11.5 6.1.13
松川 千夏	岐阜県歯科衛 生士会 東海地区歯科 衛生士教育協 議会 岐阜県歯科医 師会・大垣女 子短期大学 大垣歯科医師 会・大垣女 子短期大学	岐阜県歯科衛生士会西濃支部 役員会 総会および研修会 岐阜県歯科医師会との第1回臨床実習 説明会 大垣歯科医師会への臨床実習説明会	役員 学術集会ウ インクあいち 会議 会議	岐阜県 岐阜県歯科医師会 大垣歯科医師会	4.5.1～ 6.5.1 5.7.1 5.7.20 5.8.10

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
松川 千夏	大垣市・大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	丸の内公園ステージ横	5.11.5
	大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	モレラ岐津	6.1.13
	大垣市都市計画課	第32回大垣市都市計画景観審議会	委員	市役所4階情報会議室	6.3.29
今井 藍子	岐阜県歯科衛生士会	岐阜県歯科衛生士会西濃支部 支部長		岐阜県	4.5.1～ 6.5.1
	大垣市 大垣市医師会	大垣市在宅医療・介護連携推進事業 多種職連携・普及啓発部会		大垣市医師会館	4.5.1～ 6.5.1
川島 智子	大垣市・大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	丸の内公園ステージ横	5.11.5
	大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	モレラ岐津	6.1.13
	大垣市・大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	丸の内公園ステージ横	5.11.5
	大垣女子短期大学	歯科衛生士というお仕事を知っていますか	イベント	モレラ岐津	6.1.13
大谷 悅世	歯科衛生教育協議会	東海地区歯科衛生教育協議会	会議	ウインクあいち	5.7.1
茂木 七香	大垣市地域創生戦略課	大垣市地域創生総合戦略推進委員会	委員	大垣市役所	5年度
	大垣市男女共同参画推進室	大垣市男女共同参画推進審議会	委員	大垣市役所	5年度
	大垣市役所企画部人事課	大垣市メンタルヘルス事業	講義・個別相談	大垣市役所	5.4.1- 5.3.31
	大垣市保育者等企画研修会	「日常会話に役立つカウンセリングの知識」	講義	大垣市役所	5.7.11
	大垣市まちづくり推進課・買革盟(バイヤーカクメイ)	消費者啓発イベント「楽しく知ろうよ!消費者生活」	イベント	イオンモール大垣	5.9.2
	大垣市男女共同参画推進室	男女共同参画に関する研修会「保育環境をジェンダーの視点から考える」	講義	大垣市役所	5.9.6
	大垣女子短期大学・大垣市子育て総合支援センター	子育てママ大学 「子育て中の『なぜ?』を解き明かす～知っていると役に立つ発達心理学～	講義	大垣女子短期大学	5.10.5

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
茂木 七香	大垣市男女共同参画推進室・TuLiP (大垣女性ジェンダーについて考えるサークル)	「女性に対する暴力をなくす運動期間」 アンケート調査結果の発表	展示	ハートリンク大垣 (大垣市男女共同参画推進室)	5.11.12-25
	大垣市子育て総合支援センター	子育てまちなかキャンパス 「気持ちを切り替えるコツを知ろう！」	講義	キッズピアおおがき	6.2.20
	大垣市男女共同参画推進室・TuLiP (大垣女性ジェンダーについて考えるサークル)	国際女性デー関連展示 「これ、だれのこえ？」	展示	大垣市図書館	6.3.1-3.28
伊藤 和典	海津市教育委員会	海津市社会教育委員会	委員	海津市	5.7.29
	海津市	海津市情報開示・個人情報保護審査委員会	委員	海津市	5.6.20
小椋 博文	岐阜県立不破高等学校	教科書選定委員会	助言	岐阜県立不破高等学校	5.6.29

C. 出 前 講 義

氏 名	主催・共催	題 目	形 式	発表の場	発表年月日
光井 恵子	株キッズコーポレーション	高校進路ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立海津明誠高等学校	5.11.8
川島 民子	株ライセンスアカデミー	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	分野別説明会	岐阜県立岐阜商業高等学校	5.9.28
	チエルコミュニケーションブリッジ(株)	高校進路ガイダンス（幼児教育系）	進路ガイダンス（職業理解）	富田高等学校	5.10.19
	株ライセンスアカデミー	高校進路ガイダンス（幼稚園教諭・保育士）	職業別説明会	岐阜県立大垣商業高等学校	5.12.1
	チエルコミュニケーションブリッジ(株)	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	模擬授業	岐阜県立岐阜各務野高等学校	5.12.8
大橋 淳子	株ライセンスアカデミー	進路ガイダンス（保育系）	職業別説明会	岐阜県立大垣桜高等学校	5.6.28
	大垣市立東中学校	技術家庭科「保育の仕事とは？子どもって？」	講義	大垣市立東中学校	5.9.11 5.9.12 5.9.15
	株さんぽう	高校内ガイダンス（保育・幼児教育）	分野別説明会	岐阜県大垣養老高等学校	5.10.11
	株日本ドリコム	高校内ガイダンス（子ども・保育）	分野別説明会	岐阜県立池田高等学校	5.11.8
	株ライセンスアカデミー	高校進路ガイダンス（保育）	系統別説明会 + 学校別説明会	岐阜県立池田高等学校	5.5.11
垣添 忠厚	株さんぽう	高校内ガイダンス（保育・幼児教育）	類型別説明会	岐阜県立不破高等学校	5.5.17
	株キッズコーポレーション	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	分野別説明会	岐阜県立羽島北高等学校	5.10.16
	株さんぽう	高校内ガイダンス（保育・幼児教育）	系統別説明会	岐阜県立岐阜総合学園高等学校	5.10.23
	株キッズコーポレーション	高校進路ガイダンス（幼児教育・保育）	分野別説明会	岐阜県立大垣養老高等学校	5.11.8
	安八町立結小学校家庭教育学級	幼児の運動発達と遊び	親子参加型授業	安八町立結小学校	5.11.10
	垂井町立岩手小学校 PTA	5・6年 PTA 親子研修（睡眠と健康）	親子参加型授業	垂井町立岩手小学校	5.12.7
	チエルコミュニケーションブリッジ(株)	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	進路ガイダンス（職業理解）	岐阜県立揖斐高等学校	5.12.14

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
垣添 忠厚	株式会社キッズコーポレーション	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	学校別説明会（自由移動形式）	岐阜県立大垣養老高等学校	5.12.19
名和 孝浩	株式会社キッズコーポレーション	高校進路ガイダンス（保育・幼児教育）	学校別説明会（自由移動形式）	岐阜県立大垣養老高等学校	5.12.18
	岐阜県立大垣商業高校	進路ガイダンス	模擬授業	大垣女子短期大学	6.2.1
立崎 博則	株式会社TAP	高校内ガイダンス	講義・演習	県立羽島高校	5.10.4
	チエルコミュニケーションズ株式会社	高校内ガイダンス	講義・演習	県立羽島高校	6.1.10
宮本 純子	岐阜県立海津明誠高等学校	進路ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立海津明誠高等学校	5.11.8
	岐阜県立大垣商業高等学校	進路ガイダンス	模擬授業	大垣女子短期大学	6.2.1
田中 久志	岐阜県立東濃高等学校	分野別体験授業（デザイン・イラスト）	講義・演習	岐阜市立東濃高等学校内	5.12.4
	愛知県立古知野高等学校 定時制	職業別体験授業（イラスト・マンガ・アニメ）	講義・演習	愛知県立古知野高等学校内	5.12.4
	岐阜県立東濃高等学校	分野別オープンキャンパスガイダンス（CG・Webデザイン・まんが・アニメ・イラスト）	講義	岐阜県立東濃高等学校内	6.2.7
	関市立関商工高等学校	職業別体験授業（デザイン）	講義・演習	関市立関商工高等学校内	6.2.8
	愛知県立一宮高等学校 定時制	職業別体験授業（デザイン・イラスト・アニメ）	講義・演習	愛知県立一宮高等学校内	6.3.6
日原 広一	青山高等学校	商品開発は想いを伝えること	出前講座	青山高校	5.10.6
	岐阜県立大垣商業高等学校	商品デザイン開発	模擬講義	大垣商業高校	6.2.1
	岐阜県立揖斐高等学校	デザインマーケティング	出前講座	揖斐高校	6.2.1
黒田 皇	岐阜県立揖斐高等学校	進路ガイダンス：芸術	進路ガイダンス	岐阜県立揖斐高等学校	5.6.21
	岐阜県立大垣商業高等学校 定時制	体験授業：インフォグラフィックス	体験授業	岐阜県立大垣商業高等学校 定時制	5.6.27

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
黒田 皇	岐阜第一高等学校	体験授業：ピクトグラムのデザイン	体験授業	岐阜第一高等学校	5.7.10
	富田高等学校	進路ガイダンス：デザイン	進路ガイダンス	富田高等学校	5.10.19
	岐阜県総合教育センター	伝わる！作れる！動画の撮影や編集のポイント	講義	岐阜県総合教育センター	5.11.10
	岐阜県立羽島高等学校	体験授業：ピクトグラムのデザイン	体験授業	岐阜県立羽島高等学校	6.1.10
	岐阜県立関育知高等学校	体験授業：ピクトグラムのデザイン	体験授業	関育知高等学校	6.2.8
伊豫 治好	岐阜県立大垣桜高等学校	「マンガ・イラスト」テーマ：マンガ・コミックイラストの裾野を広げる	出前講座	岐阜県立大垣桜高等学校	5.7.21
	岐阜県立大垣桜高等学校	「マンガ・イラスト」テーマ：マンガ・コミックイラストの裾野を広げる	出前講座	岐阜県立大垣桜高等学校	5.12.20
長久保光弘	北方町ホリモク生涯学習センターきらり	きらり講座「キャラクターCGづくり」	講座	北方町ホリモク生涯学習センターきらり	5.7.22
	株さんぼう	アニメCG	職業別説明会	清凌高等学校	5.12.20
菅田 文子	チエルコミュニケーションブリッジ株	音楽療法について	模擬授業	人間環境大学附属岡崎高等学校	5.10.30
	チエルコミュニケーションブリッジ株	進路ガイダンス「音楽療法について」	模擬授業	岐阜県立岐阜各務野高等学校	5.12.8
	株TAP	音楽療法について	模擬授業	滋賀県立長浜北高等学校	6.1.22
松永 幸宏	大垣女子短期大学	進学相談会		福岡県博多	5.4.15
	大垣女子短期大学	進学相談会		北海道札幌	5.4.22
加藤 智樹	株さんぼう	進路ガイダンス（歯科衛生士職業紹介）	出張講義	岐阜県立岐阜総合学園高等学校	5.5.25
	株さんぼう	進路ガイダンス（歯科衛生士職業紹介）	出張講義	岐阜県立羽島高等学校	5.10.4
	大垣市南部子育て支援センター／大垣女子短期大学	子育てママ大学「子どもの歯・口の健康」	講演（登壇）	大垣女子短期大学	5.11.2
	大垣市社会教育推進協議会	健康講座「健”口” 長寿～いつまでも自分の歯で食べるためには～	講演（登壇）	大垣市青墓地区センター	5.11.12
	株さんぼう	進路ガイダンス（歯科衛生士職業紹介）	出張講義	近江高等学校	5.12.8

氏名	主催・共催	題目	形式	発表の場	発表年月日
加藤 智樹	大垣女子短期大学・岐阜県	小・中・高校生対象 歯医者さんで、歯科衛生士がどんなお仕事をしているか知っていますか？	出張講義	モレラ岐阜	6.1.13
大林 泰二	株さんぼう	高校内ガイダンス	分野別説明会	岐阜県立大垣桜高等学校	5.7.12
松下 健二	大垣女子短期大学（大垣市北部講演会）	健“口”長寿～いつまでも自分の歯で食べるため～	出前講義	大垣市	5.11.12
水嶋 広美	株さんぼう	岐阜県立山県高等学校	小集団指導	分野別模擬授業（2年生対象）	5.1.16
	キッズピアおおがき子育て支援センター交流サロン	「子どもの歯・口の発達と健康づくり」	講演	大垣市子育て総合支援センター令和5年度「子育てまちなかキャンパス」	6.1.16
川畠 智子	株ライセンスアカデミー	う蝕と歯周病を予防するための歯科衛生士の役割	講義・実習	愛知みずほ大学瑞穂高等学校	6.3.12
大谷 悅世	株昭栄広報	進路ガイダンス	高校ガイダンス	岐阜県立益田清風高等学校	6.2.8
小椋 博文	岐阜県立長良高等学校	面接・志望理由書対策講座	講義	岐阜県立長良高等学校	5.10.2
	岐阜県立岐山高等学校	面接・志望理由書対策講座	講義	岐阜県立岐山高等学校	5.11.6
市橋 信子	黒野子ども園子育て支援センター	子どもと一緒に絵本を作ろう	ワークショップ	黒野子ども園 子育て支援センター	6.1.30

大垣女子短期大学 紀 要
第 65 号 (非売品)

印刷日 令和 7 年 3 月 31 日
発行日 令和 7 年 3 月 31 日
編集団書・生涯学習委員会
発行 大垣女子短期大学
大垣市西之川町 1-109
TEL 〈0584〉 81-6811
印刷 二ホン美術印刷株式会社
大垣市西外側町 2-15
TEL 〈0584〉 78-2171